

鷗齋の書風一變せりとのことにごさ候。

逸事の傳ふべきもの多きうちに、曾て草庵の床の下に、箒の生じて伸ぶることを得ざりしを、良寛憐みて自ら床板を撤し、儘其の成長するに任せ、既に竹と成りて天井に達したれば、又た天井を穿ち、終に屋根をも穿ち、身は其の翠陰婆娑たるの下に吟詠自如たりしといふは、恬澹冲和、誠に愛すべき事にごさ候。人の物を饋りて書を求むるあるも容易に與へず、唯だ兒女を伴ひ行きて、毬をつかして後乞へば輒ち與ふ、彼は少女の毬を弄ぶを観るを喜ぶ、歌つて曰く、『紬裡の繡毬大千の直る、誰か言ふ好手等匹なしと、箇中の得意若し相問はゞ、一二三四五六七』と、彼は父の慷慨の氣質を享けて而も佯狂自から晦ますいふは、或は然らんと存じ候。彼は全く繡毬を弄する獅子なるべく思はるゝところにごさ候。

七 俳諧傳燈師

良寛の故宅を觀申し候、老女由利子の碑、釧雲泉の墓にも詣り、明治最初の石油井を尼瀨の濱に看て、更に俳諧傳燈碑のある妙福寺へ參り申候、庭に二株の白躑躅ありて、木古く花は大

いに且つ繁く、崖に依りて繚亂いたしをり候。さまは、雪の小山かと疑はれ申候、庫裏に導かれ寺僧と芳茗を啜つて俳諧を語り申し候、寺は貧少なれど、襖子を明け放てば玄關より直ちに日本海の波濤を領略いたし居り申候、傳燈碑は、寶曆五年三月、近青庵北溪の建つるところ、中央に芭蕉の天の川の川の吟を彫り、右に東華坊の『五月雨の夕日や見せて出雲崎』左に盧元坊の『雪に波の花やきさうて出雲崎』の句を刻りあり、石膚爛爛して、字體は早や分明ならず相成りをり候。

午餉の後、出雲崎驛より汽車にて柏崎へ降り申候、例の顔馴染の坐まり地藏に立地藏の石佛は、誰が奉納いたせしか新しき手拭を俠健に頬冠りして、大路の傍に立たせ玉ふ、一晒背を拵つて爾來久澗と聲を掛け申し候。匆々敬具。

山陰道の旅は城の崎温泉に始まりて、出雲の大社、美保關
に終る、途中、應舉寺、東郷湖、大山、船上山、御來屋、
米子、夜見が濱、安來、松江、宍道湖等の名所古蹟多し、
五日の旅なれば遍く観ることを得べし。

山陰の海を傳へて

山陰道五日の旅

一 城崎温泉

本谷川は温泉の末を集めて圓山の江に注ぐ、或夜ひそかに旅人の新妻が燕賦を流すらめ、神代の昔荒神の劍を揮つて、山を劈き島を造ると言ひ傳へたる津居山の港の迫門より、日本海の潮は江を傳ふて此處までは通ふなり、木欄干の小橋を渡れば、湯の宿は千本格子の窓を並べて、二階三階窄き路を夾んで立てり、名物の麥稈細工、出石焼を賣る店に交はりて、淺葱暖簾を垂れ籠めたる旗亭もあり、町に在る六つの湯殿、大小の差異はあれど、何れも檜の香の薫る破風作りにて、鐵道の開けし以來、太く其の舊觀を更ためたり、繪日傘を翳しつゝ、湯具を抱へて浴場に通ふ客の送迎へする湯島女も亦姣し見られたり、春の水のさゝ濁りするに似たる温泉のうちに身を浸せば、日に焦けし我が肌への象牙とばかり白く透けたり。

城崎の湯の起源は遠き昔に在り、脚を傷つけたる鴻の來り浴するを見て、始めて甘露峯の

麓に温泉の湧くを知りたるは、今の鴻の湯其の蹟なりといふ、天平年中、僧道智が曼陀羅を修して一湧泉を穿ち得たるは今の曼陀羅湯、龜山の帝の中宮安嘉門院の來り浴したまひしは、今の御所の湯、月卿雲客時に輿馬を枉げ、文墨方外の徒も亦た鞋を解き杖を留む、しほらしな山わけ衣春雨に雫も花に匂ふ袂とは、吉田の兼好が此の湯に浴みせし歸るさの雨に逢ひてての口すさみ、わけて聴く麓の泉峯の蟬とは、頼阿が夏の幾夜を温泉の宿に過せし時の吟なり。

温泉寺の春日佛師の作と稱する國寶十一面觀音に參詣し、更に汽車にて玄武洞驛に至り、圓山の江を渡りて、玄武洞を観たる翌の日は、竹野の濱に潮浴せり、柴栗山の『左右に隱岐佐渡及び三越を肘腋に睨し、滿洲女直を雲天の外に望む、酒を把つて浩然曠世の懷ありといふ文を彫りたる石は、海濱の丘に立てり、北陸佐渡を袂の陰に看むるなどは文人の誇張なれど、快晴の日には隱岐の島を水天の間に望み見るべしといふ。

二 應舉寺

竹野濱に遊びし翌日、香住の驛の應舉寺、龜居山大乗寺に詣りたり、門前の清き流れには鮎の

山陰の海を傳へて

行くこと多く、境内の老楠には蟬の啼くこと頻りなり、先づ大書院に入る、書院を繞る金襴子に湘浦八景の圖を描く、應舉の筆なり、正面の床には冕親王の台筆天機所到の四字額を掲げ、王羲之、左右龍虎の三對幅を掛けたる、亦た應舉の筆なり、次は芭蕉の間、これも金襴子に郭子儀の兒孫と戯るゝ圖にて、隣の本堂孔雀の間には、金地十二枚の大襖子を聯ねて老松と孔雀とを繪がけり、傳へいふ、この繪成りて後、堂前の鳩見て眞樹となし、飛び來りて襖子を損傷せりと、皆應舉の筆なり、この外、吳道子の原圖を摹せる十六羅漢、應瑞、吳春、源綺、蘆雪守禮の繪も多し、應舉いまだ顯はれざる時、この地に流寓して密英和尚に識られ、銀三貫を惠まれて京都の石田幽江の門に遊ぶことを得、應舉の盛名天下に布くに及び、自から門弟子を率てこの寺に遊び、和尚の恩に報謝すべく、淹留數月にしてこの繪を描がきしなりと傳ふ、鶯張の長廊下、徐かに度れたば、其の禽の少々啼す、寺後の翠嶂間毎く、の青嵐、人はこの巨匠の世に留めたる墨の香に酔ひて、啞とばかり黙して看め且つ歩むなりき。

寺を出で、矢田川に傍ふて下り、鮎狩を看、船に上りて岡見の公園に行く、江を吸ふの蘆の背に乗りて、靜なる漁蟹の村、晒せる天草の香り高き磯に着く、岡見山の老松は、山の姿を蓬

萊のさまに見せたり、日本海の眺望は竹の濱に勝りて面白し。

翌日は鳥取に行く、鐵驛を過ぎて餘部の大陸橋あり、山陰第一と稱せらるゝ桃見峠の長き隧道あり、居組の驛の錦浦、雪の白濱、岩美の驛に近く浦富の奇勝あり、沙一灣、松一灣、花さくや黄金の島の夜も光る菜種島あり、千貫松の島もあり。

三 鳥取の一夜

鳥取は池田侯の故提封、赭き瓦屋根、低き簷、薄暗き町、鼠色の土、やゝ陰鬱なる裏日本の名邑に金字塔形せる久松山あつて明淨の氣象を添へたり、城跡は夷されて在りし昔の面影を天主臺の石垣に留むるのみなり、天正九年城將吉川經家、羽柴秀吉の攻圍を受けて苦戦月を累ね糧盡き勢ひ窮まりて後、使を秀吉の陣に遣はし、己れ自殺して城を開き、士卒の死を宥されんことを乞ふ、秀吉義として之れを諾し、酒肴を贈りて籠城の苦勞を慰めたり、經家士卒と訣飲して、山下の寺に入り、秀吉の檢使を迎へて從容として屠腹せるその壯烈なる武將の終焉は、備中高松の清水長治と時を同じうして、誠に武士道の精華を發揚したるもの也、新品治町の玄忠

寺には劍俠荒木又右衛門の墓あり。

湖山の池、寶木、濱村、嶽々、驍名誰か鹿と喚ぶ、虎狼の世界に麒麟を見ると山陽氏に歌はれたる山中鹿之助幸盛の墓は、濱村驛を距る二里半の鹿野村の幸盛寺に在り、青谷、泊、泊は伯耆最西端の驛にして、車窓再び紺碧の海を見るなり、松崎を過ぎて東郷湖、温泉ありて鰻に名あり赤碕驛に入りて大山の屏顔は車窓より人を覗く、所謂伯耆富士なり、御來屋驛は海に近し、風薫る大山の大裾野に野馬の群れつゝ遊ぶを見る、木立の黒みわたりて見ゆる山は、船上山、海に近く登の光るは御來屋町なり、元弘三年春二月、後醍醐の帝の、隱岐より八重の潮路を渡りて、石の錨を卸させ玉ひしはこの濱なり、成田の小三郎勅使となりて名和の館に赴くや、一門感激し、帝を奉じ館を焼きて船上山に錦の御旗を懸へし、中國倡義の首功を成就す、其の館の在りしところに名和神社あり、町に邊りに帝御着船の記念碑ありて立てり。

四 宍道湖畔

日野川を渡れば米子町、やがて、『社日櫻に十神山』の俗語に名高き安來驛なり、十神山の翠黛

は錦の浦の波を涵す、汽車はやがて萬頃の煙波を披らける宍道湖畔の松江驛に入る、碧雲湖とは誰が呼び做しけむ、風煙繚くがごとき波の上に、淑ましくも浮ぶ嫁が島あり、五層の天主閣は今尚ほ荒れずして、亂松の間に粉壁の日に燦やくを見る、最高層を天狗の間といふ、東には伯耆の大山、西には岩見の三瓶山を望む、氣象雄大なり。

五 出雲大社

湖南の幾驛、やがて今市の驛より折れて杵築驛なり、道を夾んで旅館多し、大いなる鳥居を潜りて松並木の賽路を渡る、青銅擬寶珠の祓橋、水は浅く白葦紅蕖の間を流る、これを過ぎて土堀長く左右に連なるは出雲の名族千家北島兩家の宅なり、賽路坦として砥のごとく、當面の八雲山、豊旗雲の晴れに霞いて、其の麓に南面して八重の珠垣結ひ繞らせる大社は鎮座するなり、威武には八千矛の名に呼ばれ、仁慈には大己貴と慕はれて、山の幸あり、海の幸あり、子來の民は蒸々として、此は是れ萬家の都たりし遯かなる世のさまを想へば、山は自から悠々水は自から溶々として、王氣のいまだ全く銷せざる見るなり。

山陰の海を傳へて

珠垣のうちに入りて拜殿の前に額づく、樓門のうちに本殿儼として立てり、大黒注進といふなる大注連懸けたる御社は、上つ世は高さ三十二丈、後十六丈となり、齋明の時に六間四面と制せらる、今も尙ほ其の制なり、崇高森嚴、人なして覺えず襟を正しうせしむ。

此の宵は宍道湖畔の水樓に過せり、月を待つ、月升ること遅し、秋ならねば名物の鱸は膳に上らざりしが、鰻の美なるあり、鮎の鮮なるあり、浅く酒に酔ひたる折しも、月、栲の花散る東廂の上に升る。

六 美保岡の一夕

短夜や、水に近ければ明くるに易し、午後一時、擬寶珠の木欄橋、天神川の大橋の邊より小蒸汽船に乗りて美保關に遊ぶ、船幾たびか水村の渚に停まりて汽笛を鳴し客を呼べば、柳を穿ち芦を披いて、小艇、客を乗せ來り、又客を載せて去るなり、江盡きて中の海なり、杵築半島延びて海を劃る、其の盡るところは美保の關なり、右は境港より米子にかけて、五里の大天橋夜見の濱の松原を見る、吾が船境の港に泊ること半時はかり、やがて夕陽の海を度り

て美保の關に入る、青嶂の上に數株の松の相依りて立つは、無名の郷土詩人の歌ひたる『關の五本松一本伐りや四本、跡は伐られぬ女夫松』なり。

青山環のごとく靜なる灣を抱き、岸を繞りて人家簇々三百有餘戸、甚だ常陸の平潟の景に似たり、美保神社は大國主の子事代主命を祀る、四月七日に大祭ありて、青柴垣の神事、海上に執り行はる、建御雷神、縫津主神、天孫の勅を啣んで八雲の都に臨むや、事代主、父の尊に恭順を説き、自からはこの海に青柴垣を結び繞らし、波を踏んで去り玉ひしといふ神話に基ける神事なり、この命やがて伊豆の海に現はれ玉ひて七島を經略し、三島の大神と祀られしは、史家の稽へ誌すところなり。

海邊の旅館に入り、浴みし罷んで帯を緩らし襟を披いてこの佳麗なる海山に對す、水に沈めるの亭榭、一燈又た一燈、灯の影繁く新潮の上を走る、酒も佳なり肴も鮮、夜の美保關は歌吹海なり、正に是れ、烟は寒水を籠め月は沙を籠む、夜る秦淮に泊して酒家に近し、の情趣ある也。

神戸より船出して、阿波、讃岐の海上を度り、別府に着きて温泉巡り、大分邊の隨處の名所古蹟を探りたる記行を收む、大阪神戸よりは、隔偶の日に大分に行く船あり、中にも五日目に一回づゝ出づる佳麗なる紅丸は、遊覽船中第一と稱せらる。

神戸より別府

阿 讚 海 上

一

神戸諏訪山の中常盤に午餐をしたためて、日盛りの神戸の市を夏知らぬ欄頭の清風裡に下瞰せり、汽車の近江路に入りしより、暑さは頓に烈しくなりて、靜に座すれども汗は淋漓と背にも胸にも浹ねかりしが、此に至りて心身始めて蘇するが如し。

午後四時、我等を載せたる紅丸は、徐に埠頭を離れたり、大阪商船會社は、特に汽艇に樂隊を載せ、我等を送りて和田の岬の邊に來れり、歎治の盛意は謝するに辭もあらず、紅丸、何ぞ其の名の爾かく美しき、嚴島神社の縁起には、推古天皇の御代佐伯の翁この濱に釣りしむたりしに、遙に西の空より紅の帆を掛けたる船ありて來る、中に綽約たる神女あり、翁に託宣して濱に宮居を造らしむとあり、余は始めて此の船の名を聞きし時、或はこの神話の故事に依りて、爾か名づけしにあらざるかと思ひたりき、之を船長に質せば曰ふ、この船は元支那の長

江を上下せしものにて、三隻の姉妹船あり、名に色彩の麗しきを採りて、紅、碧、紫と命ずべく定めたりしか、他の二隻は故ありて購ひ獲るに至らず、獨りこの船を得て紅の名を冠せしなりと、海山環のごとく匝りて天然の畫圖を開ける瀬戸内海を航行する船のうちにて、佳麗匹ひなき此の船の名としては、紅丸甚だ好し、而も其の名の嚴島神話の故事に暗合したるは更に甚だ好し。

我等は船の艙に安樂椅子を列ねて美哉の海山に對せり、遙に須磨明石を看めつゝ、船は淡路の江崎燈臺の前を過ぎる、須磨明石の驛路より看たる此の島の餘りに近く且つ大きくして、翠巖依稀の趣態に乏しきと同じく、淡路の島近くより、須磨明石を望み見れば、唯だ一帶の風煙を看るのみにして、彼の明麗の情姿に缺けり、而も淡路の島山の翠微近く人の衣帽を染むるのころ、又別様の看めあり、瀬戸内海に碁布する青螺三百箇、この島は其の玄關なり、我等は明石の瀬戸の正門より其玄關を過れるなり。

明石の城の天主閣の白壁に、映る夕日の色やうやくに薄れゆきて、たそがれの海は波靜かなり、看よ、夕榮雲の美しきを、夕榮波の麗はしきを、空に漂へる雲の片々、日に映りて其紅や

神戸より別府

抑も何に喩ふべき、日に背きし其碧きや又何に匹ふべき、濃紫を凝らすちどら波、雲の色、その上に敷いて、見渡すがぎり、紫、紅の縷縷をなすなり。

一一

紫の海又た紅の空、余はこれを大自然の調色板に喩へんと思ふなり、讃の洋や豫の灘や、碧翁は其の巨筆を揮つて、大圖畫を澹粧濃抹するなりき。

日既に暮れて海色は猶明らかなり、歸漁の船、眞帆片帆相逐ふて行く、晝に見て布帆の白き、夕に看れば其の色は墨の如し、誠に奇なり、食後、浴し罷んで更に蒼莽たる海風に當る、快言ふべからず、船員に遊藝を善くするもの多し、三等客室に餘興場を設けて、筑前琵琶、薩摩琵琶、浪波節、落語、講談、多々、益辨ず、宵淺うして新月眉の如し。

一夢甚だ平穩なり、曉に醒むれば船は今治の沖を度れり、御手洗の島又た齊島、滿眸の青螺、或は晴れ或は陰る、此の明媚なる海島の一に居を卜して、詩酒の小王國を建つるも亦た甚だ妙なるべしと思へり、乏しき韻字を探りて詩を作る。

風月の霸權は辭章に屬す、海山環のごとく匝り蔚たり封疆、滿眸の青螺は圖畫の如し、好し兒孫を冊して嶼王と爲さん。

船は豫州の濱に傍ふて行く、四國の山何ぞ奇抜なる、大河内、釋迦、岩の森、高萩、高綱の諸峰は曉色淡き空に抽き、屏顔笑ふて余を迎ふることし。

朝七時半、紅丸は高濱の埠頭に着く、多年の遊蹤は四方に遍かりしかど、余はいまだ四國の土を踏まさりき、今日しも端りなく余が靴の痕を四國の一端に留め得たり、前に興居の島あり、桃は此の島の名産なり、桃を咬りながら高濱の町を看たり、九時、船は直路別府を指して進む、島迎へ島送る、午後二時、船は伊豫洋の中心に在り、左に佐田岬を望み又佐賀の關を見る、海門迫り來りて潮は漸く急なり、海氣蒼茫の中に、遙の空に尖碧の峰頭を露はすは、萬葉の歌にも著るき四極の山なり。

別府温泉巡浴記

一

左舷、水や空なる其の間に、一髪の碧を拖ける佐田の岬は、やがて夏霞のうちに澹れ行きて青嶂環のごとく匝れる。燕安灣は、曠やかに船頭に露はれたり、我が紅丸は、靚粧したる愛娘の母の家に入るがごとく満船飾を作して、徐かに別府の埠頭に入るなり、車を驅りて港屋旅館に就く、時に午後五時神戸を出でしより正に一晝夜なり。

暑を攘はんと慌たゞしくも浴池に飛び入る、さゝ濁りする春の水に似たる温泉滑かに膚に觸れて、心地よさ言ふべからず、浴罷んで後襟を潤うし帯を緩うし、欄干近く油團を移して、徐かに明媚なる海山の景を攬るなり。

四極の山は標高正に千二百尺、其の形や整に似たり、山の巔に大友氏の據りしといふ城の趾尙ほ存し、風煙縹渺として趣姿あり、林に猿多く棲めりといふ、山の裾漸く延びて地藏が岬

となる、四極の山に隣て耳取、小鹿、乙原、實相寺、觀海寺、加來殿、大平の翠巒あり、乙原觀海寺の邊の一帶の平蕪は、黒田大友兩氏の古戰場にて、夏草や武夫どもが夢の跡也、大平山の背に聳ゆるは鶴見山、其の後に桔梗色の峰頭を露はすは、豊後富士なる由布岳なり、その峰々の裾遠く、白き煙の揚がれるは温泉の烟なり、烟の末は搖曳いて更に數峰の碧を添ゆるなり。山を看るの眼を移して欄頭更に海を觀る、北は文珠二子の堆翠長く海に入りて國東半島となり、南は關崎の岬角潮を扼して、この明淨なる一大灣を開き、積水浩蕩として硫黄が洋の三十六灘に連らなる也。

一一 砂 風 呂

温泉の町は夕風して、蕉衫那邊にか涼を趁はんとするぞ、不老泉又楠の湯に浴罷みたる人々は、今宵の祇園祭の行列を觀んとて、四辻毎に潮黒き露の入江を見せたる町に集へり、萬燈高張、灯は數町の長きに互り、青篋にて作れる地走舞臺の、葉毎の露に鮮かなる灯の影を滑らせつゝ、鼓笛の歌を載せて行くが其間に交はれり、祇園囃子の優雅なる、絶へて他の祭に見る喧鬧の

趣なし。

四神の旛につゞいて、鳥兜して鋒を杖き、隆き鼻を反らしたる金睛朱髯の猿田彦、金色の瓔珞きら／＼と揺めいて、徐に渡る神輿には、紙に捻りし賽銭の、灯に集まる白蛾より繁く飛ぶなり、行列のさまは他の郷に見るものと異りたる節の多からねど、集ひ観る男おみな、操る言葉に京語あり薩音あり、其の服装に其の髪容に、諸國の風俗を集めたる背景や亦面白し。今宵は雨戸を鎖さぬ臥戸に眠れり、蚊のなきは殊に嬉し、軒に近き四極の山、眉のごとき月ありて慇懃に枕を照し來るなり。

明けて朝、旅館の裏の小門を啓けて濱の眞砂路を散歩す、干潟の沙の上に幕を圍みて、其處に砂湯する人多し、速見が濱はつゞくのが濱、手をもて濱の砂を掘れば、處として温泉の湧き出でざるはなし、人は枕を携へて溝なす沙の中に身を横たへ、頭のみを露はして全身に沙を掩ふ、温泉は鹵沙に和し軟かに四肢を温むるなり、清雅なる島田は薬罐頭と隣り、婀娜なる束髪は角刈と並ぶ、五分刈、白髪、銀杏返し、唯見る横斜幾畦の沙の上に、凡ゆる人の首を栽えたるがごとし、こは是れ別府温泉以外には、看ること能はざる奇觀なるべし。

朝餐の後、導かれて町の諸泉場を看る、不老泉尤も莊麗、三階作りの巨館なり、海濱に近き靈潮泉と大字濱脇の東温泉とは、浴池に石を登みて十數區に別ち、底に鹵沙を敷き、海濱なる沙湯のそれのごとく沙中に坐臥して浴するなり、天福に富みたる別府の人は、一錢を須ゆることなくして、儘隨處の浴館に赴きて、其の無盡藏の温泉に自由に澡浴するを得るなり。

三 風薫る觀海寺

千松風を啣んで蟬の鳴く音や雨に似たる別府公園。今上、皇太子にて在ませし時、暫くは鶴駕を駐めて海山の景を嚮はし玉ひしといふ佳躑の處には、老松門を護りて檜の木づくりの御殿立てり、趨り拜みて後山水園の泉石を觀る、此處にも温泉の湧き出づるを、石を登みてこれを湛え、浴室のさま清らかに潔よし、園の主人今都に在り、玉なす温泉の可惜流れて石乳空しく香ばし、いでや衣を脱き捨て、日午の暑さを洗はんと思ひ立ちしを、人に促されて又車に上る。觀海寺は寺の名なり、やがて山の名となり復た温泉の名とはなれり、鶴見が岳の裾の一壟、崖に倚りて層々の樓立てるは温泉の宿なり、車を捨て、余は人に先だつて突貫し、松屋とい

ふに先登して逸早く浴室に入る、三層樓上の亞字欄邊は、正に蓮の入江の大觀を總攬し、潮の雲に粘するところ、彷彿として豫州の山を見るなり、鶴見岳の裾野扇のごとく開けて直に的が濱に至る、平蕪蒼々として水村山廓其の間に綺錯せり、是はこれ石垣原の古戰場にて、慶長五年の秋九月十三日、大友義統、石田三成に與して陣を此の地に進め、中津の黒田如水と決戦し身は擒はられ國亡びたるところなり、宿將吉弘嘉兵衛、鏖戦して國に殉す、荒草のうちの苔白さ一短碣は行客の墮涙の痕を留むるなり、『石垣陣の盆くどき』とて、里の人は今尚この勇士の華やかなる最期を詠ふ、『さつさ吉弘嘉兵衛様は、一つ枕に三百餘人、切るは切れども多勢の相手、七度たゝかふ戦の中に、一度かけざる鬼神なれど、疲れはてたる多くの味方、今日を限りと小高き石に、腰をうちかけ呼ばはりたまふ、敵に名を負ふ武夫あらば、我を打取り高名せよと、時に太郎助十六歳で、人に勝れし後藤や目ぬき、種子が島にて打取りたれば、これに館の滅亡となりて、残る軍勢死にもぐるひ』と、聲調沈痛、人をして泣かしむるなり。

石垣原の村長は甚だ事を解せり、水無川の鰻の蒲焼、其の汀に生へる水芋の莖の膾、殊に吉弘嘉兵衛の墓畔の地を拓いて栽えたる琵琶の實を摘み來りて、食後の水菓子として侷めたる、趣味やまことに饒かなるを覺ゆなり。

更に薜蘿の關を敲いて觀海寺の藥師堂に詣る、眉雪の老僧齡七十七、仁聞の作と聞く藥師佛に賽し、又大石良雄の描くところと傳ふる歸竺の達摩の墨畫を展觀す。

四 燈 紅 き 町

古觀海寺の藥師堂に隣りて、村の長の莊あり、入りてその秘藏の古刀、古瓦、石斧及びくさくさの器甑を觀たり、南蠻鐵の鑿は、村の長これを石垣原の故墟より拾ひ獲たるものとぞ、無残やな兜の下のみりくす、こはこれ誰が勇士の元に載せたるものか、幾口の太刀、手に信せて抽いてこれを觀る、丁字亂れや大みだれ雲を奔らせ、燒刀の匂ひ露を凝らす手裡の秋水さやかに鬢眉をうつし、暑魔潛み藏れて清風徐に面を吹くなり、耽看する間に諸友は既に去ると遠し、疾歩して山を下りて追ひ及べり。

此の夕、別府俱樂部に人と歌を聴く、宵深き湯の町の灯や紅し、欄外の風に淺き醉を吹かせつゝ、漫天の星屑潮に罩むる蕪蕪の海に對すれば、秦淮夜泊の人ならずとも、誰れか閑愁を惹

かざらんや、實に建久の昔大友能直、霸府の庶出をもて恩寵群を超え、豊の國の守護職として、鎮西の奉行を兼ね、幕僚郎黨を引き具して船路遙かに鎮西に下り、この別府の濱脇に旆を建て、四邊の豪族を討伐して、今の大分市に近き古の國府に館を築きしより、其子孫相承けて廿二代文祿二年の秋、石垣原の戦ひに亡びしまで三百九十二年、その中にて勝れて英主と聞えしは、大友休庵宗麟その人なりき、勘合の印符の權を握りて明國及び葡萄牙國と交易し、蓮華のさまに海に浮びし瓜生島の、未だ地震の爲めに洩没せざる以前の此の菡萏の入江には、西洋の船、唐の船、晴るゝ帆、陰れる帆の來去して、今の大分の湊なる神宮寺の浦には、在留の葡萄牙人煉瓦作りの座を並べ、府内には孤兒院、慈善病院、教會堂、大小學校などありて、殷賑なる極東最初の貿易市となり、府内に對する別府として、その温泉の町は、亦紅毛綠眼の人の來り浴みしもの多かりしならむことを想ふなり。

五 龜川の半日

今日は血の池地獄、海地獄、坊主地獄など見廻りて、鐵輪の湯の町に宿るなりと案内する人

はいふ、石は爛れて餅のごとく土は煮えて泥のごとき紅蓮、阿鼻の地獄のさまを、この三伏の盛暑を冒して觀に行く、如何なる前世の業果なるらむ。

先づ北石垣に鬼の岩屋といふを見る、傳へて往昔土蜘蛛族の巢居したるところなりといへど一見して古墳の址なるを識るべし、燭を乗りて其の奥に入れば、岩華落葉、風なけれども亦自から涼し、鬼の岩屋より一路御越町の龜川さして車を驅る、長汀速見の濱より續いて的が濱となる、鎮西八郎の此處に射騎を習ひし故事を傳へて爾か呼びしなりとぞ、海に傍ふて簇々數十百家、龜陽泉あり、四の湯あり、殊に潮退く後の洲渚一帯、軟沙を穿てば温泉は隨處に湧き、例の沙湯する人亦多し、御越町長、船を舩して余等を載せ、勇ましき綱引のさまを觀せしめたり、紅き鉢巻紅き布禪、打てば鋼の音にや響かん黒光りする金剛力士、肉は隆々と男性美を發揮したる漁夫ども、曳々の聲を揃へて綱を引く、額より肩より背より、瀧なす汗の流るゝを若者一人大柄杓を執つて、ざんぶくと潮を濺ぐ、潮に淋漓と濡るゝも霎時の間に、照る日の威は猛にこれを晒かす、潮はやがて復壯夫の頭上より濺きかけらるゝなり、余等は船を近づけて、飽かずこれを看めたり。

網に上れる獲ものや多からざりしが、的が濱邊に天幕を張りて、野趣横溢の午餐の筵に、其の魚を膾にしたる興味は仲々に深かりき、殊に日盛りの驛路を、紺の香高き旅館の貸浴衣の揃ひにて、手にく村人より贈られし渦巻、蝶花、柳に蝙蝠などの繪日傘かさして行くさまは、人の眼をや側だてつらむ、白龜塚といふあり、老松其の上に翠織を張る、承和年間豊後より朝廷に獻じたる白龜は此の地より獲たるものとぞ、暑さ甚だし、池亭に憩ふてサイダーを倒すと頻なり。

六 血池地獄と柴石温泉

龜川の温泉の町より海に背いて山に入る、木の間に又山陰に、蓮の入江の長汀曲浦は見え隠れして、涼意を余に嘘けするなり、日午の山路、丈なす山菅早や紫の穂を抽いて高く雲の峯を拂はんとする其の下陰に、苔の清水の湧き出でなんと凍れども有ることなし、路に傍ふて流るゝせざらぎの、石を繞り篋を穿ちて琴筑の音を奏づるゝあれど、掬べば指を爛らし隕すべき熱泉にてあるなり。

今日の暑さは地獄巡りする相應しゝと、強ひて自ら豪語しつゝ、旋て血の池地獄といふに來り、三面を小山に圍まれて、朱の熱泉を湧き湛えたる池にてありき、立ち升る煙の澹青く蟬時雨の木立を掠めて、其の末は春づき頼れて數峯の雲となる、池中の泥は煎え爛れて全く赤く、折からの斜日これを射て、炎風人を吹き焙る、若し三つ矢サイダーと氷と微つせば、余は終に熱殺さるべかりしなり。

爛れたる朱の泥に筆を濡して、余も人も紀念の手帕に名を記し、更に其泥に染て纈纈の手帕を作る、手にく壁き食ふ茹卵子、籠に盛り池に浸すこと數分時にして、斯くは全く熟するなり。

一行は慌たゞしくも此處を去つて旋て又山に入る、溪あり村を貫いて竹樹幽靜、溪に枕むで浴館多し、こは是れ柴石温泉なり、温泉は溪東の巖の罅隙より湧く、石を登んでこれを湛え樋を架けて之を落す、溪中に石多し、奔湍半はこれ温泉なり、漱石枕流の興は他の温泉場には絶えてなきところなるべし、溪間より出づる粘土岩を割けば、柴葉を彫めるとき紋理あり、名づけて柴石といふ、地名はこれに原づくなるべし、湯の瀧、湯の流れに汗を洗つて、柴石園の

亭中に睡ること半响ばかり、欠伸して起てば、かなくと啼く、蜩の、早夕陽を催し來れり。柴石より海地獄に行く、池の潤さは三反八畝に互り、深藍色を湛ふ、泉質は炭酸泉、深さは四百二十八尺、熱度は二百十度と註せらる、舊記に載するところに依れば。曾て妬婦あり、憤し身を投ず、全身沸爛、少時して唯髪の浮び漂よふを見るのみなりきと、これを彼の血の池地獄に比すれば、陰悽にして荒涼、久しく居るべからざる也。

七 金輪温泉の一夜

海地獄を見て復坊主地獄に行く、煮え爛れて飴とばかり熔けたる泥の、金輪際より噴き上ぐる硫氣を孕んで、小なるは椀のごとく膨らみ、大なるは甕のごとく凸まり、新陳相依つて池心に踴躍するさま、焦熱池底に何の鬼物かあつて出頭没頭するかとぞ訝からる、豊後風土記の言ふところ玖倍里湯の井は、當に此れをいふなるべしとぞ。余等は既に諸地獄を踏遍して、満身の汗を揮ひ盡したり、唯隨處に三矢サイダーと平野水とあつて、心身始めて蘇するがごとし、亂蟬聲中、黄昏を催すのところ、青嶂を負ひ平蕪を前に

して、碧蕪粉壁、薄紅に夕日彩どる鐵輪の温泉の町を望みつゝ、歩なみ次第に疾しや疾し。

鐵輪温泉は、昔は坊主、海、血の池の其のごとく、鐵輪と呼ばれたる大いなる地獄なりしといふ、建治二年、一遍上人、石毎に法華經の一字を記したるを投げ入れて之を埋め、茲に泉場を開きたりと言ひ傳ふ、今も尙ほ到る處に熾烈なる蒸氣を噴出するをもて、家毎の簷の陰に孔を穿ち、土を累ねて圓き竈を作り、其上に釜を載せ鍋を置いて、薪炭を須ることなくして善く飯を炊ぎ魚菜を烹煮するの利を享くるなり。

温泉の町は山に依りて、石を登める路の迂餘せり、大平屋なる洋館の最高樓に宿す、前に實相寺山の積翠を看、平蕪直に別府灣に接し、眺望太だ快濶なり、何はさて取り敢へず、館前の浴場に飛び込む。

富士屋といふに村の人の饗を受けて、微月の山の里を漫ろ歩く、盲ひたる少年の、琵琶を抱いて行く、歌ふあり、唯ある家の涼み臺に呼び留めて大石の打入りの一曲を聴く、浪花節に似たり、浪花琵琶と謂ふべきかと打ち興ず、遙に鼓聲の響々と聞ゆるは、余等の爲に村人の盆踊を催すにてありき、灯に送られて往いて看る。

踊りて振りて御目にかけてよ、田舎ならひが面白い、笠のほひが戀となる』
 『笠の下から一目見た、一目見たさへ面白い、ひんや肌そうたら、しゆみませうか』
 地獄染の手拭に顔を隠して、猫ぢやらしの纈纈帯、誰が家の子も交はりて、夜闌くまゝに踊りの環は次第に大なり。

八 明礬湯と新別府

翌早、夙めて起きて館前の共同浴堂に入り浴す、温泉益々として浴池を溢れ、四に顧みれどもなし、余獨りこの潤き浴堂を占斷し、大の字様に池心に身體を浮けて、やゝ熱き泉の肌膚に滲み入るを都の朝風呂の心地よきに較べ娛しむ、浴池を出づれば膚は紅纈纈のさまに赤くなれり、快や言ふべからざる也。

鐵輪温泉、古來蒸風呂をもて其名高し、朝餐の後往いて之を看たり、地下咫尺のところは湧する熱泉の上に、石室を構へて、窖のごとくす、潤きは八疊敷ばかり、土砂を敷き、石藁の葉を編み作したる蓆を展ぶ、中央に石の柱ありて上に一盞の燈を燃やし、柱を繞りて十六個の

石の枕を置くなり。

窖の口極めて窄く、扉に代へて蓆を垂る、窖の上、石壁を穿つて藥師如來の龜を安置し、燈明香火を捧ぐ、人は蓆を掲げ蒲伏して入り、幽かに照す燈火の影の下に石の枕を摸索して軀を横へ、土砂藁蓆を透して鬱蒸する泉氣に温むるなり、凡そ十分時をもて限度とし、新人陳人次へくと枕を易へて代謝するなり、松葉杖に扶けられて來りし脚の萎えし人の、湯治幾週の後全く癒えて、棄て去りし杖幾本となく窖の戸口に懸らるゝを見る。

圓太郎馬車に載せられて明礬湯に行く、鶴見山麓に在りて、別府温泉系中の最高處なり、湯の花の製造場を看、又明淨なる温泉に浴して、裾野に續く速見濱、水村山廓を一望の中に收めつゝ午餐をしたため、終に馬車の轅を回して別府に還る、途に豫て余と相識れる千壽氏の經營する新別府温泉土地株式會社の新市街地を觀たり。

此の地、實相寺山を負ひて春木川に傍ひ、海拔三百六十尺、十五分の一の自然傾斜をなし、海を距ること半里にして近く、夏涼に冬は温、眺望ただ快潤なり、現に拓ける面積は一萬五千坪、地を夷し石を甃み、四間幅の道路を井字に通じて宅地を適好の區劃に平分し、莊毎に温泉

及び上水を供給する設備全く整ひ、一時若くは年賦をもて之れを賣るなり、余が友田口掬江の如きは既に其の一區の地を購ひ得たりといふ、幾年ならずして、閑雅なる一大別荘地郷を實現するなるべし。

地圖を按ずるに、鶴見が岳の懷より湧く諸泉脈は、其の裾野の地縫を傳ふて隨處に各種各様の温泉を噴き溢ふ、實相寺の翠阜の上に兩脚機を立て、線を描けば、南の別府より、北の龜川に至るまで、觀海寺、堀田、明礬、鐵輪、柴石を通じて半圓形を畫き成さるゝなり、中に就いて別府は諸泉場の長者なること勿論にて、所謂泉都なり、泉量の豊富なる、市廛の殷賑なる、日用の物資需めて得られざるなき繁華の温泉の町なれど、一たび朝見川の上游なる觀海寺、堀田に往けば、積翠に倚り平蕪に臨みて境致や閑靜、明礬、鐵輪の諸泉場、又た皆海山の眺めを備へ、山阿溪隈にある柴石温泉、地區は窄けれど亦幽寂、若し夫れ龜川の温泉は、別府より村巷絶えて復た續くこと一里半、的が濱の上に在りて、別府と共に蓮の入江の風光を平分し、氣象大だ明麗なり。

泉の都なる別府温泉は、斯くして此の諸泉場の大綱を摠攬するなり、繁華を喜ぶもの、閑寂を愛するもの、遊散を欲するもの、養痾の目的をもて來れるもの、之くとして可ならざるはなし、これを東京附近に其の匹儔を求めなば、若小田原に温泉あれば甚だ相似たるを思ふ、別府は小田原なり、觀海寺、明礬、鐵輪、柴石は箱根の諸温泉なり。

さりながら、余は別府に就いて大いに語るに能はざるなり、余は別府の町に四夜の旅寢を重ねたれど、晨朝より暮夜に至るまで、車に馬車に離齷として遊覽に慌ただしく、雨夜又晴曉、時に游目し時に靜觀して、此の泉都の情致と興趣とを味ふに違なかりしなればなり、是れ余の多憾とするところなり。

春日浦と摩崖佛

一

血の池地獄の池の泥、鬼が岩屋の岩の苔、袂に裾に青丹の痕を染め成し、汗の暈をも留めたる浴衣を脱ぎ捨て、別府の宿屋の石風呂に納々と身を浸す間もあらばこそ、車は早や門に候

して、此の夕大分市の緝紳諸氏の主催なる邀宴に赴くべく促すなり。

襟の白きに代え、襟飾の新たなるに易へて、慌たゞしく車に上る、日は午なり、埠頭に乗り捨て、汽艇速吸號に搭す、四極の山の青嵐、さゞれの波に浮動して、日や陰るへる海の上の晝餐の團樂、佛崎の沖を過ぎては、三味線網を卸す漁夫の打魚の業を眺めつゝ、蕪香の入江を南に指して船を駛らせ、三百餘年の昔大友氏の覇を九州に稱せし時、紅毛南蠻の船の來り泊せし春日の浦の埠頭に上り、百四十餘萬圓の鉅費を投じて構築せられたる新港の壯大なる規模を看、更に車を聯ねて遂に大分紡績會社を觀、賑しき市廛の間を過ぎりて紅蓮白蓮咲き満てる舊城の濠に傍ひ、廓内なる大分縣廳に黒金知事を訪ふ、相傍へて中庭を歩し、濠上の四阿に憩ふて四邊の風光を聘望す、縣廳は元の本丸の在りしところ、而して此の正廳は、今上の東宮に在ませし時、鶴駕を駐めたまひしところ也、庭に佐賀の關の黒石白石を敷く、黒きもの漆のごとく白きもの脂のごとし、又ホルトガルと稱する奇木あり、樹膚は梅に似て其の葉は柳のごとく、小さき青き實を垂れたり、大友宗麟の時、葡萄牙人の齋し來りて栽えたるものなり、大友氏亡びて風雨三百餘年、獨り此の樹あつて、極東の貿易港たりし大分市の當時を語るなり。

縣廳を辭し去りし後、余等は同好の士と共に、古國府に近き幽崖に彫られたる古佛像を看んとて行く、敏達帝の御宇、百濟の僧日羅來朝して途此の地を過り、丘阜のたゞすまゐを察て凡境ならずとなし、翠崖の陰を相して藥師二光佛及び十二神將の像を鑿りたるもの即ち是なりと傳ふ、實に摩崖の彫像としては、當に本邦最古のものなるべし。

大路小路の四達して、井字のさまに整ひたる大分の市を出で、南を指して走ること一里ばかり、前車又後車、蹴だて、行く風埃は面を撲つて、斜陽の路殊に暑し、されど幌深く掛けんには、四邊の聘望を妨ぐるをもて、扇を翳して日を遮り、所謂古の碩田の唯中を行くなり、途に一堆の丘を過ぐ、老松あり、傳へて百合稚大臣の塚といふ、百合稚は豊の國司、豪雄にして克く鐵弓を挽き鐵箭を射る、外夷九州に寇するの時大臣討ちて之れを對馬に破り、凱旋の途風濤に遭ひて玄海洋中の一孤島に漂流し、石を枕にして鼾睡し連日覺めず、叛臣別府太郎次郎の二人、竊に其の弓箭を盗みて國に歸り、領土を篡奪す、百合稚夫人大は悲み、愛養するところの鷹その名を翠丸といふを放ちて夫君の之くところを捜らしむ、數日にして翠丸、百合稚の血書の翰を啣みて還る、別府兄弟の兇暴日に増長し、終に夫人を納れんとし、夫人の肯かざる

を怒り、郎黨忠太を遣りて夫人を蔣の池に沈めしむ、忠太夫人を殺すに忍びず、吾娘満壽を沈めて夫人を救ふ、三年を歴て百合稚故國に還り、二兎を誅し、寺を建て、満壽の冥福を修す蔣山満壽寺是れなりと傳ふ、古傳説、頗る海寇的色彩と佛教的影響ある中古武家物語の風趣あり、寛永年間、一夜大風雨、塚上の老松、壊倒して根を露はし、下より石棺を出す、これを發いて巨人の骸骨及び甲冑太刀を得たりといへば、縦し百合若の塚ならずとするも、昔の豪傑の墳たるは説くまでもなし。

野水平坡を申いて流れ、籬落甚だ寂寞、圮橋の邊に車を捨て、一民家の庭を過ぐれば、當面の翠崖に彷彿として數體の佛像を見る、極めて疎鬆なる沙岩なるが爲に、千餘年來の雨霜に霽爛して眉暈臉影澹として無からんとし、その端嚴の妙相を仰き、精美の巧技を觀るに由なきも其の中なる一軀丈餘の跏趺佛のみは、石膚剝落して莓苔を生じたれど、形體や備はり、古粉尙ほ白ふして雪のごとく、殊に處々に殘存する老硃の色は、鮮紅新に研を出づるものゝ如し。

二

跏趺佛を距ること南數十歩、鐵道線路に傍へる崖面に、又十二神將の像を鐫れるを見る、岩華落莫、莊嚴の手法を蝕して、唯其の姿態を彷彿するに過ぎず、今に於いて速かに覆宇を設け雨霜の淋打を防ぎて愛護せざれば、我邦最初の梵刹なる古岩屋寺址の希世の物は、終に湮滅するに至るべし、太だ惜むべからずや。

余は車を輓走る小川の上に停めて古國府を顧望したり、林丘のたゞすまる異趣多く、野橋茅店皆當年の事を想ふの料ならざるはなし、由布鶴見の兩雄峰を挹りて、几案の上の珍玩とし看めたる大友館花岡の址は、車頭に見ゆる平丘なりと吉田菊南氏は指さし語る。

車を回して蔣山満壽寺の門前を過ぎ、復大分市に入り、二三子の物産陳列場を看んとて行くに別れて、余は獨り豊州新報社長野氏の莊を訪ひ、秘藏の書畫を展觀す、凡て數百幀あり、九州の先儒、先覺、名匠の筆は言ふも更なり、遠く京攝の文人墨客の作に及ぶ、時の促るをもて、心靜かに群妙を看ること能はざりしは憾み多しとするところなり。

更に車を急がせて縣立物産陳列場に赴き、疾歩して巡覽し、再び車を驅りて春日浦なる蓬萊館に入る。

古蔵の海に傍へる青松一路、眞砂を洗ふ素波の去來、瓜生島、藕の花の咲くさまに入江の上に乗る其の昔は、此處に西洋南蠻の船を簇らせ、鯨鼓蟹笛、月明かに風清き夜の賑しさは如何ならむ、今や縣費を投じて構築したる新港將に竣功せんとし、日向線及び肥後線の鐵道も亦近き將來に聯絡せんとす、大分市の東九州に雄張すべき機運は到來したるなり。

舞臺に校書の舞踊ありし後、十二歳の童女野上榮子、筑前琵琶の堀部安兵衛高田の馬場の一閱を語る、妙音聴く人を酔はしむ、市の素封家中尾氏特に余等の爲に其の九製の書畫を出して展覽せしむ、閣上宴席の正面の床には、多能村竹田の繪がくところ柳陰漁父の大幅を挂ぐ、文政二年、竹田四十二歳の時の作、大作家をして驚嘆せしむ、樓下の室に土佐光起筆の桐に鳳凰の一幅を掛く、典雅にして優麗、余は未だ曾て此の如き精妙なる光起の繪を看ざりしなり、帆足萬里の詩あり、穆茂、看る者をして襟を正さしむ。

三

雲の峰に夕榮して、薩摩灣は正に紅蓮の海と見えたり、晴るゝ陰れる千帆の影漸く黄昏れ行けば、泊船の燈の赤き青きが新潮の上を走り、春日浦、松にさざんざの清籟靜也、松を抽く一峰は、此處に幾夜の旅枕、晨に夕に唇顔笑ひを含んで行、座常に余に親しめる四極の山なり、蓮の入江は此の山あつて、殊に紫明の看めを添ふるなり。

蓬萊館の此の饗宴は、市の縮紳を網羅したり、市長の挨拶に次いで、余は一行に代りて謝辭を述べ、説いて大友氏の盛時に及んで感懐禁する能はず、宗麟氏の葡萄牙より輸入したる巨煩春日の浦より陸揚し、この利器を得て四隣に雄張す、營に陣を破るのみならず、城を抜くのみならず、威力當に邦土を潰滅するに足るべしとして、此の巨煩に國崩と命名したる當時の赫々たる威勢を挙げ、西洋南蠻の賈舶を集めたる神宮寺の濱や昔、新港全く成りし春日浦の今、若し夫れ日向線肥後線の鐵道貫通するに至らば、大分市は昔の繁榮に回り、他年もし再遊の機縁あらん時、余等は驚異の眼を拭ふて殷賑なる新大分を看るなるべしと述べたりき。

灯に映りて五色の霧を吐くに似たる玉藻の翠、花の紅を封ぜし飾氷の、宵淺き夕風に瘦て行けど、宴や闌なは興や央、何時果つべしとも思はれず、十時といふに席を辭し、花電車に乗りて海を前に山を背に、星月夜の路を三里、ひた走りに別府に還る、夜涼水の如し。

實にや今宵は別府の四夜の旅寢の最終の夜なり、旅館に還り浴みし罷んで、醒を解く芳名一
碗、流石に言ひ知れぬ閑愁を催すなり、出で、黒岩氏の莊に行く、竹樹清新、泉石甚だ幽邃な
り、涼を挹りて歸つて、枕頭に日名子氏の贈るところの多能村竹田の印譜を看る也。

門司より九州本線の小倉に至り、別れて豊州線に乗り換へ、
中津にて降り、更に耶馬溪輕便鐵道ありて柿坂に至る、汽
車の窓より耶馬溪が一覽さるゝ也、但し耶馬溪五里の間、
馬車も通じ俾も行く、中津には福澤諭吉翁の故宅、大雅堂
寺あり、宇佐は中津より四驛の南に在り、驛を下りて西一
里七町、此の篇には宇佐八幡叅詣記、大雅堂と雪池、耶馬
溪一覽記を録す。

宇佐八幡と耶馬溪

字 佐 道 中

今日はしも、別府の町を去らんとするなり、かりそめの旅の客なるを、宿の人皆別れを惜み首途の幸多かれと、頭つきの魚を調じて酒を侑む、上車の時は促れども、濃やかなる情を留みかねて盃を把る、送られて停車場に行けば、人々既や車に上りて余の來ることの遅きを待ち詫ぶ、

汽車の龜川驛を過ぐる時しも、黄帷子の衣に袴穿きたる五十左右の人あり、大いなる玻璃壘に酒を盛りしを携へて入り來る、白髪交りの髯は胸を掩ひ、をどろの髪にも二毛あり、風丰甚だ人に異る、衆皆眼をもて相挑みて何者ぞやと訝り見るなり、送れる人のうちに識るものありて、私かに告げて曰ふ、神心教主安部登一猊下なりと。

初め東京發軔の前數日、真心教大根本園貫主の名をもつて、世界第一の勝區根本園に於いて午餐を饗せんと招待状を寄するものあり、此朝又別府に書を寄せ來る、曰く、世の木鐸を以て任ずる先覺先生は、須らく全世界第一等の眺望を全世界に紹介するの任務あるべし、卿等は何ぞ大思想家の大法螺を聴聞せざる、抑も鶴見四極の景は、我が大根本園の爲に天の築きしものなり、別府に遊んで大根本園に遊ばざるものは、佛を作つて魂を入れず、龍を繪いて睛を點ぜず、家に入りて主人に遇はざるものに似たり、さりながら、縁がなければ、目と鼻の間も左様なら也と、真心教主なる其の異人は、今余等の前に立てるなり、余も人も其の大法螺を眞額より吹き掛けられんことを懼れて、我こそ出で、挨拶すべけれといふものなし。

汽車、次の驛に停りし時、教主猊下は余等に携へ來りし燒酎一壘に、盃數個を添へて贈り、車を下り長揖して余等を送る、壘に兩行の文字を記せし紙を貼りたり、曰ふ、少しく用ゆれば大藥劑、多く用ゆれば大毒劑と、其の言、其の人と共に太だ奇なり。

渠を知れる者は曰ふ、渠、常に七字の題目を唱へて人に説くこと二十年、其説にいふ、孔孟は仁義を説き、老佛は虚無と寂寞とを説き、耶穌は愛を説き、マホメツトは勇を説く、我が真心教は之を綜抱して尙ほ一段の善美を加ふ、嗚呼妙法燦然經、這箇の七字の寶號は宇宙の大精神なりと、自ら靈教々祖救世宇大法主と號すといふ、狂人か將た達士か、余はこれ知らず

余は誰だ其の言の洗洋として自ら恣まゝなるを喜ぶなり、贈るところの焼酎を含んで額に胸に臂に塗る、暑魔の去るを覺ゆるなり。

午後二時、宇佐驛を下り、車を聯ねて宇佐八幡宮に賽す、行く／＼御食川の濤を過ぎ、和氣清麿公の君臣分定の神勅を受けたるところといふなる大尾山の積翠を望みて、車を大鳥居の下に捨て、櫺の古木の林は深み、苔厚うして塵もなき邊に清き餉をしたゝめ、白雨するかた訝からるゝ萬蟬の聲の裡を徐に下宮の珠の御垣の内に趨り、階を登りて拜殿の草の圓座に危坐り、拍手稽首して神酒をいたゞく、本殿は今修理中にて、此の下宮に遷座あるなり、一の御殿には應神天皇、二の御殿には素盞雄尊の御女三柱の比賣神、三の御殿には神功皇后を奠め奉る、恭しくおろがみすれば、何かは知らず涙の自から睫を潤すなり。

導かかれて營繕中の本殿に詣り、寶物を拜觀す、天復の年號ある古梵鐘、櫻町、光格、孝明三帝の御裝束、玉纏の御太刀、一條、後鳥羽宸作の御劔を始め數百點あり、刀劔の殊に多きは軍の神にて在すが故なるべし、舞樂の面亦多し、皆鉦匠の作とぞ聞ゆる也。

細川忠興の寄進したりといふ西の樓門を出で、寄藻の川に架せる吳橋とて、屋根あり欄干ある御橋を度り、鐵の大鳥居を過ぎ、驛に還りて折からの汽車に上り、四時、中津の町に入る。

先づ留守居町に福澤諭吉先生の故宅を觀る、在りし昔のまゝなる築土の比隣相隣りて、門甚だ肅條たる窄き路に入れば、唯ある小さき門の内に、福澤諭吉先生舊宅と勒したる石ありて立つ、茅葺屋根板廂、廂の陰に一間の入口あり、土間は勝手を貫い庭に通ず、入口の左は立關、肱掛の格子窓あり、此の家は、福澤先生が、六歳の童時より二十五歳の青年時代に至る十九年間、双親の膝下に在りて徳器を修養したる處なり。

門口の柱に、検査済と記せし小さき紙札の斜に貼られたるは、大掃除の後と知られたり、清らかに洒掃されたる土間を過ぎて、余等は先づ屋後の庭に入る、前栽は幾つもの畦を作して露、唐辛などを栽ゆ、後園は三十坪ばかりもあるべし、竹林に隣て、蜜柑、柘榴、楓、柚、橙の樹あり、三株の棕栢あり、皆先生棲みし時の儘なりといふ、一樹一草、皆是れ甘棠なり。

雪池と大雅堂

宇佐八幡と耶馬溪

庭に向ひて二間の縁、八疊の間なり、縁の裯に腰をかけて、此の故宅を護る老翁と相語る、縁を距る三尺ばかりにして梅の古木一株あり、幹は空洞となれど、枝葉は軒を掩ふ、梅の木の陰に井筒あり、鎖に結べる釣瓶を下して口を漱ぐ、水や甘冽なり、春風老梅の花を吹かん時、水に妙香あるべし。

八疊の室の次に九疊の室あり、長押作りなり、家の正廳なるべし、元來十疊の座敷なりしを其の一疊を割いて床の間を作りしなり、床には福澤先生の畫像を掲げ、床の隣の凹處の襖子を啓けば、佛壇あり、此の座敷は表に面して小さき庭に對す、柚の木、百日紅、石榴の木あり、苔の石二個三個、庭といふ風情もなく、低き築土塀は小路を割れり。

後園の竹林に隣て塗ごめの物置小屋あり、こは是れ先生が常に書を読める處なりといふ、内に入りて細き險しき梯子を攀づれば、梁は低く頭を壓し、床板は歩む毎に軋々と老鼠の啼く音に似たる響きを發す、三尺の窓、棧の疎き障子ありて僅に明りを採る、此の窓の下に小さき机を置いて、荒席の上に坐し、終日孜孜として書を読める先生の風貌を恍として眼前に睹る心地したり、大盃なるべし、大いなる楓の葉一枚を摘み取りて、余は手帳に挿んで此の日の紀念となす。

福澤先生の故宅を出で、大雅堂寺の名に高き自性寺に詣り、其の書畫を觀たり、累代國守の菩提所とて高大なる伽藍なり、本堂と庫裏との間に、潤やかなる石疊ありて石の井筒の車井戸を穿てり、塵垢に塗れたる衣服を脱却し赤裸々となり、二斗も容るべき此の大釣瓶より、寒冽の井華を頭より浴びかけたらむには、如何に痛快なるべきかと思ひつゝ、僧に導かれて奥の書院に入る。

僧に導かれて奥の書院に入れば、襖にも、板戸にも、西と北に繞らせる露縁の雨戸の裏にも處嫌はず貼られたる大小數十枚の書と畫とは、池大雅の筆に成れる九霞山樵の落款あるものならざるはなし、

書は多く大字、全紙の鴛箋に七絶を書するもの、若くは七言一句を揮灑して一字の大きき鴉の如きあり、字體は奔放又洒脫、準繩をもて律すべからず、畫には米點山水多く、又渴筆をもて行るものあり、風韻高逸、斯の人の性情を流露して爛漫たり、中に就いて、一幀の内に餘白なきまでに去波來波を描けるものあり、前に頽爛ありて次第に恬和の遙波に入るところ、靜かに

看れば波の自ら動き自から鳴るがごとき想ひあり、淡彩の葡萄の圖の、露は凝る紫玉累々、其の一顆を摘んで唇に啣みなば、定めて旨からんと、看てさへ唾液の津々と湧くあるもあり、殊に小品の山水に妙趣あるもの多く、其の墨澗れ筆の渴する、淡々揮灑し去つて、形似の外に言ふべからざる真趣を傳ふ、人物畫のうち、四睡の畫の睡和尚と睡虎のごとき、尤も妙と稱すべし。

池大雅は、作られたる人にあらずして、生れたる人なり、其の畫は則ち其の人、其人は則ち其畫なり、物質的生活を超越せる渠の全人格は、賦して其の作るところの繪に宿れるなり、生活に囚はれ、形似に拘み、物質的智識の境域に離脱せる人の作れる畫を看たる眼を拭ふて、此の超凡の畫に對すれば、恍として塵の世に在ることを忘るゝなり、眞畫妙畫とは世智の入らざる畫を言ふなり、世智の入れるは墮落せる藝術なり、大雅の作は眞畫妙畫に幾からむ。渠は扇を商ふ家に生れ、扇に畫を描きて諸國を行商し、名山大川に遊んで丹青の氣を養ふ、柳里恭に親しみ、祇南海と善く、曾我蕭白と交はり、又白隱禪師に參す、清人の粉本を得るに及んで南畫の眞趣を得得せしは、彼が烟霞の痼癖あつて、北は松島、南は九州、其の山水の遊

びが悟入の捷路をなしたりしならむ、資性恬澹、名利を度外にし、妻玉瀾と琴瑟相和して眞葛ヶ原の草庵に貧に安んず、亡母の棺を自ら擔へり、恩家の病める、毎朝其門に候して風雨にも罷めざりき、人の爲めに描かんと諾し、使者屢々來り促すも筆を執らず、使者門を出で、此の死繪師、人を勞すること幾たびぞ、高慢か、横着か、懶惰か、それとも人を侮るかと罵るを聞いて飛んで出で、袖ひき留めて罪を謝し、直に筆を執りて畫を與へし逸事もあり、純正の性情愛すべし、

余は大雅の畫に對して其人と爲りを憶へり、耽看して時の移るを知らざりき、余、中津に來りて二つの深き印象を銘感す、曰く福澤先生の故宅、曰く大雅堂寺。此の夜、忘言亭に酒を飲む、中津第一の旗亭とか聞きつるが、割烹の技に長けたる庖人ありと見え、侑むるもの皆口に適ふ、夜闌の欄干の邊に歡晤して興は盡きず、車を捨て、漫天の星屑、雨ふるがごとき中を歩いて、旅館茗荷屋の門を敲く。

耶馬溪一覽記

一

山陽は『耶馬の溪山天下に無し』と嘆美し、五岳上人は『南宗の畫訣君説くを休めよ、耶馬の溪山是れ我が師』と稱揚せる耶馬溪を、今日は始めて觀る日となりたり。

少小、山陽氏の『耶馬溪圖卷記』と其の絶句とを讀みし以來、親しく斯の地に遊ばんことを思ひたりき、文字の生涯に入りてよりは、歳毎に汗漫の遊びを好み、北は古魯朴瑠氏の遺窟を搜り、西は朝鮮、支那の一角にまで征蹤を留めたれど、不思議にも四國と九州の南部と東部とに遊ぶの機縁なくして過したりしを、今茲端りなくも四國は豫州高濱に霎時ながらも靴の痕を印し、更に大分、別府、宇佐を歴て、今日はしも、宿昔の想ひ馳せたる耶馬溪を觀るを得るなり。

八時、旅館を出で、停車場に赴く、家々多く栽えたり凌霄花、朱の盃とも見ゆる花今や繁く咲くなり、院線中津驛より岐れて、柿坂に至る十五哩三十七鎖の耶馬溪鐵道あり、山陽先生は、耶馬溪の遊觀に六日を費したりと聞けるを、余等は杖せず又笠せず、柔かき蒲團の上に安坐して、茶を飲み煙草を喫し、時に諧謔し、時に吟哦しつゝ、喘ぎて攀づべかりし山を窓外に迎へ、掲げて渉るべかりし水を輪下に送る、安樂といへば安樂、便利といへば便利なるが、亦た殺風景と謂ふべき也。

山水宗の隨喜者なる其の平生に反いて、靴を鞋にも代えず、帽子を笠にも易えず、殺風景と罵倒せる汽車に乗りて恬として耻ぢず又た悔ひずして、耶馬の山靈水伯に見ゆるを、他は訝かり且つ晒はなむ、然はあれども、遊ぶ日に限りありて、同人に乞借したる閑も盡きたり、其の歸期を愆まらんことを慮れて、今日はしも、唯だ此の溪山を一瞥見して、平生の願ひを成就せんと思へるのみ也、『一瞥屏顔未だ情に飽かず』余は當然この憾を懐くべく、他日再び『耶馬溪頭再度行』の機縁あらむことを心竊に樂しむなり。

中津の郊外を過ぎて一望平蕪、左方に茂林を見、林の缺けたるところに伽藍の屋背を見る、こは是れ古城の正行寺とて、彼の雲華上人の棲みし寺、山陽來遊の時、詩酒數日の淹留を重ね

たるところなり、車左、遙に富士に似たる山を看る、これ由布が岳、其の類嵐峭嶽は、別府道中、晨に夕に、我が顔色を照したる熟面の山なるなり。

二

山は平林を帯びて沖田の千町田を環匝す、汽車は青蕪のうちを串いて行くなり。憶ふ昔、崇徳帝の御宇、山國川氾濫して、村を流し田を荒す、斯くてあらば、村人は旋て魚となるべし、如何にせばやと七人の地頭額を鳩めて評議したり、地頭の一人に湯屋彈正といふものありて、此の上は人柱を立て、堤を築き、堰門を設けなば、河伯の怒りは解くべしといふ議は終に決したり、遮莫誰が其の人柱に當らん者ぞといへば、身に着けたる物を川に流して河伯の旨を承けむ、沈みたる物の主こそ人柱として河伯の召さるゝ人なれと誓ひて、七人の地頭は各袴を脱ぎて投げ入れたるが、水は忽ち渦まきて彈正の袴を呑み去りたり、斯くて彈正、人柱と定まりたるに、家臣吉野重定の女に鶴女といふあり、齡三十五、先づ年父を亡ひ、又其の夫を喪ふ、進み出て、妾は孤にして且つ寡なり、世に承らへん望みなし、父祖累代の主恩に報

ひん爲め、願はくは妾をして主の身に代らしめ玉へといひ、留むれども肯かず、年甫めて十三なる其の子市太郎、亦た母に殉せんと請ふて止まず、地頭等涙を揮つて之を許したり。其の日は來れり、鶴女は髪を洗ひ身を淨め、其の子と共に衣裳を更めて板輿に上る、昇く人送る人、泣を掩はざるはなし、石鳴り水吼ゆる川邊に到りて、母子は人々に訣別し、輿と共に徐に堰門の水底に沈む、悽絶又た慘絶、定めて知る四山の木物は哀鳴し、満川の渦波は於邑したるならむ、時は保延元年八月十五日也。七人の地頭幾多の村民、皆な涙眼を睜つて江の心を目成る折しも、二羽の金色の鳩ありて水中を出で、雙飛して八幡の森に入る、村人、その鳩を止まりし處に社を構へて母子の靈を祀り八幡鶴市神社といふ、汽車、鶴居村の邊を過ぐる時、扶疎たる林中に小祠を見たるは即ち是れなり、巾幗の人、一身をもて幾多の生靈に代る、何ぞ壯烈なる、この心は正に神明佛陀なり、山水の美を鍾めたりといふ耶馬溪の第一關に、斯の人間の最高至貴の精神を體現したる義婦の古傳説あり、想ふ、母子の水に赴くの宵は正に中秋、雨足り雲收まつて昊天明淨、大月清輝を發して慇懃に沖田の堰門の波を照せるなるべきを。

大貞公園驛を過ぐ、公園は宇佐八幡宮の攝社薦神社の鎮座するところ、上の原驛又眞坂驛野路餅の名に著るき野路驛を過ぎ、手斧立の山の麓の墜道を過ぐれば、車頭始めて山國川を見る、寫眞に又畫葉書に相識れる鮎返しの瀧は正に窓外に在り、谷を斷ちて石横さまに列り、水を攔めて湍を懸け、湍を湛えて潭をなす、其規模は甚だ小に、四山も亦姿態に乏し、正に是れ扇頭の小景なり、汽車やがて樋田驛を過ぎ、鐵橋を度れば、窓左に競秀峰あり、耶馬の溪山此れより始めて佳境に入るなり。

三

山國の川、水は昨雨に半篙の高きを添へたりけむ、競秀峰の靑積翠その上に敷き、水と映發して碧は暈し緑は滲す、競秀峰は其の名の如く、奇峰相依り相攢まつて互に其の秀を競ふものに似たり、老樹は懸生し、古薜は纏絆す、亦た奇觀たるを失はず、但し凝灰岩と輝石安山岩とより成れる集塊岩なれば、黯き緒と鈍き青の色を錯へ、蒼潤な古の趣に乏しきは、之れを夫の甲州御嶽の昇仙峽なる覺圓峯邊の看めに較べて、或ひは遜色あべきを思ふ也。

競秀峯の下、隠々として洞門を見、又た路の洞門を貫くを見る、今より百六十四年前、禪海和尚が三十年の苦行をもつて、自ら開鑿したるところなり、船を傾うて峯下の水濱を遡れば當に畫中を行くの想ひありといふ、寶道の下、來往の人の語る聲、馬の嘶なき鞅の鈴の鳴る音、川に嚮つて幾處か穿たれし石の窓より洩れ聞えて、音響清越、この路の末や仙家に通すべしとぞ疑はる、列嶂の影を倒まにして水に在るもの、或ひは伸び或ひは皺み、棹を投ずれば搖蕩して乍ち碎け復た合ふなり、爾く妙趣はありといへども、余は下野より越後に下る阿賀川の上流の、野澤より麒麟山邊に到るの溪山の勝に及ばざるを憶ふなり。

禪海和尚の事は、人多く之れを知れり、越後高田の人、少壯江戸に來りて旗下の士中川某に仕へしが、其の妻と私して事露はれ、主人を斬つて跡を晦まし、豊後由布山麓の興禪院に入りて實照和尚の戒を受け、刻苦して道に進み、後耶馬溪に住みしが、棧道の險危にして行旅の太く艱むを見て一大慈悲心を起し、一身の力をもて寶道を開鑿せんと發願し、手から錘を執つて石を穿ち峯を貫く、斯のごときもの三十年、其の業將に成らんとしたる時、中川某の子、四方に父仇を求めて端りなくも此の地に來り、禪海と相逢ふ、禪海名のりて避けず、唯だ寶道

開鑿の業終らん日まで、命を我に假せと乞ふ、某これを諾して又自ら役を助け、一日も早く功を卒へて不俱戴天の仇を報いんと勉む、禪海年六十四にして大願始めて成就し、從容として刃を受けんとす、某や既に禪海の徳に服し、且つ誠に感じて復仇の念を擲ち、刀を収めて還る禪海安永三年齡八十八にして示寂すといふ、秀麗なる溪山を背景にして、前には魔にして後には佛なる這箇の老僧と、其の徳化に感激して修羅の妄執を放下したる若き武士とを點出す、何等絶好の戯曲的傳説ならずや。

四

汽車は競秀峯と青生の寶道とを溪の左に望みつゝ、宇洞山の下を過ぐ、遙に一橋の水に架るあり、徂徠の人馬を點出して畫趣を成すなり、是れ耶馬橋なり、橋左、積翠の山相依り相重なり、深遠にして其の奥を知らず、嵐氣の甚だ蒼茫たるを見る、大化の昔、竺僧の來りて伽藍を開きしといふ羅漢寺は正に此の奥に在るなり、羅漢寺驛を距ること十六町と註せらる、山陽は、山、水を得ざれば生動せず、石、樹を得ざれば蒼潤ならずと説き、羅漢に至つては則ち人工のみと

罵倒し、貝原益軒は、『諸國を多く遊覽せしかども、斯ばかり奇絶なる處を見付らず』と嘆美す、山陽は唯だ這の寺のみを評し、益軒は山上より見たる大觀に就いて言ふなり、夕陽初めて沈むの處、朝暾未だ上らざる時、烟嵐溪山に満ちて且つ流れ且つ春き、水を奪ひ山を偷み、峰巒の出頭没頭するさま、大小羅漢の眉を結び肩を並べ掌を抵ちて啞笑するものゝ如きの看めに至りては、耶馬第一と稱せらる、但し余の遊びし時は、日午燬くがごとく、空に膚寸の雲もなく、終に烟嵐の奇を観るに由なかりしなり。

冠石野驛を過ぎて、溪左に三日月神社を望み、又た賢女ヶ嶽を仰く、峰の勢ひ奇峭なり、今より千百餘年、天長の昔、下毛郡の大領藤野勝宮守夫妻の棲みし莊の址なりといふ、夫逝ける後、其の妻難波部首子刀自賣若うして美なり、再譙を勸むれども肯かず、節を守りて死に至るまで故宅に居る、其の事時の朝廷に聞えて旌表されたり、『忘れずば頼みし人の面影を、一夜はうつせ三日月の池』の遺詠を誦するもの、誰か其の至情に泣かざらむ、秀麗の溪山は、實に幾多の美しき古傳説を藏せるなり。

冠石野の山の下を過ぎて、洞窟の中に養老の古刹久福寺の伽藍を含むといふ巖洞山を見、路

は又た溪に近づきて、水光山色相映發す、過客此に到りて願望して去る能はずといふ意をもて、此邊を立留と呼ぶなりとぞ、されど汽車は少しも停らず、攀頭、披麻、解索、斧劈など、天然の活粉本を羅列する奇峰を窓の左右に送り且つ迎へ、溪轉じ路回つて應接に違あらず、醉仙巖又烏帽子が岳、長淵の水、倒影皆な揺いて、首を回らせば來路都て是れ繪なり、口の林を過ぎて、奇峰の上に自然の石橋を作せる小河内の天橋を空外に仰いで、終に山陽擲筆峯下の梯坂の驛に入りて車は停れり。

山陽が、肪脆水のごとき豪猪の肉を煮て下物となし、連りに大白を引いて溪山の勝を攬りしといふ一孤店は、今は喫猪亭の名に呼ばれて多く客を延く、入り憩ふて後、更に車を雇ふて所謂新耶馬溪の勝を觀んとて深瀬支溪に向ふ。

五

柿坂より左に折れて深瀬の溪に傍ふ、重峯複嶺路なきがごとくにして復た通ず、行くこと一里にして鹿熊山あり、翠微雨のごとく人の衣帽を吹く、又行くこと半里にして竹の弦の隧道あり、

車を駟つて隧道の央に至りし時、前路に當りて馬の嘶くを聞く、暗中より睨しみれば、薪を載せたる車三五輛あり、路窄うして相讓ること能はず、車夫と馬丁とは臂を戟にして、引き回せよと互に罵り喚めくなりき、其の聲隧道に衍して、岩乳霰のごとく幌を撲つ、斯くてあるべきにあらざれば、余は車を捨て、飴のごとき黄泥の中を蛙歩して、獨り先づ隧道を出で、疾歩して行けば、一水逕を絶ち、木橋あり普門橋といふ、數家村あり、唯ある家に傍へる廐のうち、老馬の繋がれたるを見、借りて騎らんと思ひつゝ、音なへど人は居ず、唯だ屋後の深樹のうちより、亂蟬の聲に和して鄙歌うたふが聞ゆるのみなり、崖より竹の樋を架して、岩清水を樋に落し、缺けたる椀の浮べるあるに就て、嗽ぎ又髪洗ひ、木陰にありし幘のごとき苔石に腰うちかけて、待つこと良久しうして車始めて來る。

行くこと又半里、峭崖の下を過ぐ、柴石巖といふ、粘土岩層の剝落して木の葉の模様を印するをもて、斯く呼ぶなりと車夫はいふ、崖邊又鳶岩あり、其の形鳶のごとし、共に奇とするに足らず、行くこと又半里、平原なる寒村を過ぎて、溪を隔て、七福巖の奇峯を仰ぐ、數十尺の怪石、相擁まつて深樹の中より抽き、互に其の奇を競ふなり、戟を執つて立つものは毗沙門天か

鹿に靠つて坐する者は壽老人か、大黒天の寶椎を手にして米苞の上に踞せることきもの、辨財天の琵琶を抱いて石に依ることきもの、鶴を侶へる壽老人、竿を擔へる夷三郎、唐子を肩に載せたる布袋和尚、其れかと見れば中に肖たるはありながら、又頑怪の岩のみにて、兒女の歡笑に値ひするに過ぎざるなり。

やがて鳴良の村に入りて早梅橋を過ぐ、溪右に復た奇巖の一群團を仰ぎ見る、鳶の巢巖といふ、數十尺の大石、柱のごとく簇がりて積翠の上に躍出するなり、奇觀と謂ふべきのみにて、佳眺とは言ふべからず、新耶馬溪、山は深けれども峯に秀容を缺き、谷は窮れども水に奇態なし、新耶馬溪は、終に舊耶馬溪に及ばざること遠きなり。

一つ家を過ぎて一孤屋に入り、落泉に涵したるサイダトを飲みて憩ふもの少時す、卷柿といふものあり、熟柿を打つて餅のごとくし、繩をもて之れを束ね巻きたるなり、輪切りにして皿に盛る、色も形も味噌漬大根のごとし、試みに其の一片を食へは甜美なり、茶媒として妙なるを覺ゆ、其の一苞を乞ひ受けて終に車を回へす。

六

柿坂の驛、吹猪亭の邊、前に擲筆峯の奇峯を仰ぎ、後に耶馬の清瀬に枕むところ、山陽先生の腰掛石といふがあり、山陽が雲華上人を拉し來りて、此の石上に憩ひ、瓢酒を傾けて溪山の看めを擅るまゝにしたるところなりと傳ふ、夷らなる楮き石にて、廣さは一疊ばかりあり、山陽が前日の遊踪を尋ねて、再び此に來りし時、孤店の主個其の面を識りて『大人は先日猪を召し上つたお客様ではござりませぬか』といひ、山陽點頭いて『うむ爾うぢや、復た山を看に遣つて來た』と問答したる當時の光景を眼前に彷彿す。

頃日、中里眞清、梅谷薫路その他の有志者發企して、金を齎し、腰掛石を其儘の臺石として山陽翁會遊紀念碑を造りたり、余の耶馬溪に遊ぶの日怡も竣成し、端りなくも其の除幕式に會せり、余等は延れて式場に列す、集まるもの數十人、洋装したる中里氏の令嬢年十三、傘んで綱を引く、幕落ちて碑出でたり、高さ八尺許、山陽翁會遊紀念碑の八字を勒す、大阪の藤澤南岳翁の筆なり。

式辭、演説などありし後、強いて余を起たして祝辭を求めらる、余、今山陽の舊蹟を趁ふて端りなく此の溪山を看、更に又此の記念碑の除幕式に會ふ、亦奇縁なり、敢て推讓せずして壇に立てり、曰く、山陽先生は耶馬の溪山は天下に無しといひ、此の山水を目して海内第一となす者は、乃ち頼子成より始まるといはれたり、先生は交通機關の備はらざる世に在つて、其の足跡は幾ど海内に半す、一介の小文人をもて一世の鉅家たる山陽先生に比するは、其の倫を失すること甚だしといふべけれど、交通機關の整備せる昭代の餘澤に頼りて、余は山陽先生よりも多く天下の山水を看たり、斯の遊竊に耶馬の溪山を取つて、天下の山水と商量せんと思ひたるが、山水はその遊ぶ時期に依りて其佳眺を増減す、山陽先生の遊びしは臘月に在り、其文を讀めば落木寒巖、奇峭を極む、今次の遊びや正に仲夏、草木繁長して山骨を掩藏し、大いに奇趣を減じ、先生の所謂、群峯水を夾んで攢竦して春笋の矗立するがときもの、石數層、夏雲の狀をなすもの、樹は石の罅より横生、縦生、倒生して上指し、叢生して石を蔽ひ、石と勢ひを争ふて之に勝たんと欲し、石又樹中より奮躍して出で、而うして石陰皆苔、紫綠相間はり、或は石の半面を没し、或は全身を没す底の奇觀に接せざりしは、大憾とするところなり、他日再遊の機縁

に遭ひたる時んば、此の溪山の眞面目を看んと思ふの意を述べたり。

溪畔の式場なれば、言語の徹底せざるを虞れ、余は勉めて音吐を大にしたり、聲は擲筆案に研して、耶馬の木魘石魘の掌を鼓して啞然大笑するもの、如し、式終りて還れば、村の若者屋臺に上りて撒餅式を行ふ、帽を傾けて餅雨の中を過ぐ、中るもの數、兩三個を拾ふ。

午後二時半、柿坂を發して四時中津に還り、俟つこと霎時して門司行きの汽車に投ず、東九州の汗漫七日の遊びは茲に終りを告げたり。

黄昏の關門海峡を度りて、七時半馬關より最大急行列車に搭す、別府町助役日名子太郎氏は余等の往路には豫州高濱に迎へ、毎日余等の爲に韓旋の勞を執り、又遠く馬關に送り來る、厚意謝するに辭なし、日名子氏は九州に於ける千年來の故家なりと聞く、家に傳はれる天平の古文書は日名子文書の名に呼ばれ、大學の史料編纂の資料として錄せらる、別府に在るの日、余は此秘藏の文書を觀、又徳川時代の儒家桑門畫匠諸名家の尺牘を展覽す、氏が多年蒐集したるものなり、今次の征路、到るところ竹田、五岳の繪、萬里、淡窓の書あり、鉅館の床の間はいふに及はず、烟茶の少憩を攝る茅店の壁にも亦懸る、氏素より鑑識に長ぜり。余が爲めに一々

これを指示して其眞贋を辨ず、余は終に竹田、五岳、萬里、淡窓の書畫に就いて、終に大通となり了せり。

門司、香椎、博多、熊本、人吉、鹿治木町を歴て、鹿兒島に至る九州幹線隨處の遊覽記を收む、門司より鹿兒島まで二百三十八哩強、急行列車なれば十時間を費す、名所故蹟を一覽するには、五日の旅路にて十分なり。

鎮西縦貫記

鎮西縦貫記

一 山陽道中

聽濤仁兄足下、足下の演説を聴くに及ばずして、余は飄然として鎮西一周の途に上れり、足下請ふ且らく政論の閑處より去りて、閑處に安息し、脆美の膾、芳烈の酒、余がものがたりする山陽道中の會心の山水美に聴き、足下の好める盃中の物と共に足下が磊塊に沃ぐとを得せしめよ。

月の十六日、午後四時東京驛より馬關に向ふの急行列に車上る、筆箋、封筒、楊枝、石鹼の外に雜品數點を盛りたる通草の手提籠は、余が携ふるところの唯一の行李なり、其の輕簡なるは、應に夫の聊齋の童話中の、小狗に似たる白馬の背に駄して、日に百里を行かしむるに堪へたるもの、中に山陽詩抄より抽きもて來れる西遊詩稿一篇あり、請ふ余の旅具の太だ貧寒なるを嗤ふを休めよ、

秋立つてより以來、生え抜きの江戸兒ながら、不思議にも脚氣を病みて久しく酒を廢したりしを、折からの黄昏の疎雨は岑寂の旅の心を咬して食堂の人となれば、面白や淺き三蕉の醉心地、千切くの夢を載せて夜を渡る東海道、何處ぞとも知らぬ驛に汽車の少時は停まる時しも雨は始めて蕭々の聲を作して窓を打ち、下駄の齒の音慌たゞしく虚廊に銜するを、恍として夢やうつゝの境に聴く、曉の京、朝の大阪、汽車の踏切の邊、番傘、蛇目、洋傘の簇がり集ふ。雨の山陽道、十二時を過ぐる頃、福山驛に停車して恭しく鳳車を迎へ奉る、岡山より廣島、雨粧ひ煙り裊する巖島の看めや殊に住なるを覺えたり、路は砥のごとし、並木の松も風趣あり、山に入り又海に傍ふ、凡そ藝備の道中におもしろきは赤瓦葺きの家多きとなり、雨に潤ふて殊に鮮麗、又屋を繞つて多く蜜柑と柿とを栽えたり、柿の實や既に熟して酣紅、柑子やいまだ霜あらざるが爲に尙ほ青し、詩すべく又繪くべき也、路、厚狹を過ぎて山勢西に奔り、やがて足下の旗幟の直指する閩族の巨卿の身を起したる長州に入るなり、赤馬の關又文字が關、潮は萬葉を涵し山は千帆を護り、筑の山豊の山は煙紫重々、車蝦の膾、河豚のちり、酒は明ち灘の生一本、風流足下のごときは、應に三日酔ふて起たざらんとするなるべし。

二 香 椎 宮

春潮學兄足下、月なき夜の關門海峡、漆よりも黒き昏潮に、閃黄又た閃白の無數の灯の影を涵す港の繁華を聯絡船の窓の邊に看めて、壽永の昔し幼沖の天子龍の都に赴きたまひし海を渡り、やがて海に近き唯ある旅館に一夜を過したり。

疎雨、簷に音すれど、織りて簾を成すには至らざる朝寒の、晴れては實にや小春日和、南國の旅なれど冬なればとて、薄き外套を着て來たりしに、これも用なしとて脱き捨てしが、尙ほ額に汗の滲むを覺ゆるなり、汽車大里を過ぎて疎松の間より海光の碧なるを見る、六連島は風煙の外に在り、欵帆仄帆、總て晴れに媚ぶ、枝光、八幅の製鐵所、高く抽く無數の煙突より噴き騰く煤烟の、紺碧の空に幾萬斛の濃き墨を澄し滲ませて、霽雨をふらす其の壯觀は、唯だ人をして啞ならしむ也

香椎驛より車して官幣大社香椎宮を參拜す、親友稻村香池園の、近ごろ播州垂水の海神社より新たに此の宮に大宮司たりしかば、兼て久瀾の情を叙せんと思へばなり、寂びて靜けき町を

過ぎりて野水の滄を行くほどに、甘干の熟柿を軒に懸けたる茅屋、鈴生りせる蜜柑樹の枝を伸べたる柴垣の、路は幾曲りしてやがて石の鳥居の前に至る、宮は積翠の松の山を背にして、高き石垣に境域を劃り、正面には朱の樓門、左右に筋堀を繞らして登石の賽路清らかに度り、更に二段の石垣を築き成して朱の四脚の中門あり、廻廊長く連りて朱の拜殿、朱の瑞垣、中に神功皇后の御靈をいつき祀れる本殿あり、香椎宮は實に仲哀の帝が熊襲親征の大難を建てたまひし當時の大本營の故地に造營せられしなり、帝中道にして崩れたまひしを、長門の豊浦の宮の邊に無火殞殞しまゐられて、皇后親から四境の不逞を夷げ、更に新羅親征の鴻略を建て、水師海を度りてこれを征服し、御仗を王宮の門に立てて其版籍を收め、凱旋したまひしも亦この香椎宮近き濱なりと傳へらる、其御鎧の袖に挿し玉ひし綾杉の、世繼の神樹今に榮えて、中門の前に朱の瑞垣結び繞らせる其のうちに、薨々たる細葉綾を織るがごとく、翠の殊に濃やかなるを見る。春潮學兄足下、我邦の神社建築が、上古に於ては皆素木造りなるは、世俗の穆茂なると、清淨無垢を尊べる神道の本義に由るなるべし、其の殊を塗り丹を施すに至りしは、佛教傳來の後伽藍建築の影響を受けしものなるべきか、凡て神社あるところ必ず深遠なる茂林あり。老翠の

奥、朱丹の宮、色彩互に映發して亦別様の崇高なる妙趣を看る、余れ今新に建てられたる香椎宮に賽して、殊にこの感を深くす、足下の説を聽かんことを思ふ也。

三熊本市

移山詞兄足下、余は今始めて銀杏城下に来り、坪井の川に枕める客舎の一室に詩囊を卸し、足下の龍南健兒たりし時、日夕學びの窓に相親しめる阿蘇の雄峯を仰ぎ、空に抽く大銀杏の、その葉の正に酣黃して折からの夕陽に榮ゆる熊本之城を看て、坐る當年の禁啼將軍の風貌を偲ぶの念に禁へざるなり。

香椎宮に詣りし時、友は今や草色の袍に紫の袴して、神の御前に祭を奉仕しむたりしなり、遽に聲かけて友を驚かさんことを恐れ、少時は朱の階の下に佇みて、式の終るを俟てり、式を終へて階を下れる吾が友の儀容の雍々たる、膝を交えて爾汝相呼べる時の其人とは正に別人のごとく思はれたり、相見し時の友の驚喜は如何ばかりしぞ、曰ふ、余、その人を君と見し時は、畏けれども少時神の御前に在るを忘れたりきと。

社務所にて霎時語るほどに、發車の時刻に迫りたれば辭し去りたり、多々良の濱、海の中道、名島の辨天、千代の松原、悪浪時に天を蹴りて魚龍驕れる玄海を彼方にして、此處は山遠く波平に、風日人に媚び、胡元來寇の陳跡終に尋ぬるに由なし。

汽車の窓より宮崎八幡宮を遙拜し、博多驛に入るや、五分時とは間もなく來れる鹿兒島行の急行列車に搭じたり、ボーイの旅客に對する甚だ親切、夫の東海山陽線のボーイの、錢を與ふると否とに由りて客を遇するに冷熱あるに比すれば誠に心地よし、聞く九州鐵道管理局にては、ボーイの客より錢を受くることを嚴禁すと、洵に善し、他の管理局のボーイが客より錢を受くるを默認せるは、人の子を賊ふものと謂ふべき也。

植木、木葉は明治十年役の激戰地、櫛や葉を染むる尙ほ淺し、車窓に阿蘇の雄峯を看めつゝ、午後三時半汽車は熊本に入れり。

四水前寺

新知の友は、この夕余を拉して水前寺に往けり、唐人町は市の繁華の中心なるべし、新市街

と呼べる市の端ちかき一區域には、劇場、活動寫真館の粉壁、聖籬、窄き路に欵り立ちて、鼓笛の聲喧すしく、往來の人の心を嚇る、正しくこの市に於ける淺草の六區なるべし、本朝相撲の司なる追風吉田家の在る地とて、兩國の國技館を小型にしたる相撲館あり、今や菊人形の三段返し、夜を晝と賑へり、大路に續くプラタナスの並木は、立冬既に節を過れど未だ霜を見ざればにや葉は尙ほ青く、桐梧の肌の色なす其の幹の徑尺に餘るもの多きを見れば、この樹の栽えられて既に久しきを知る、其の枝に鳥籠をかけて、金絲雀、文鳥、繡眼兒などの少禽諸々として大路の並木の陰に啼き交はすも、初旅の余には坐る南國の風趣を覺えたり。

九州の大邑と聞えたるこの市に電車なきは、甚物足らぬ心地せらる、唯だ市の端より郊外への交通機關に輕便軌道ありて、玩具のごとき機關車の烟突より、煤烟を窄き町に噴き散らして往來する、覺えず人をして鼻を掩ふて避易せしむ、樹の多き市、殊に銀杏の多き市、車聲の耳に聒すしからぬ市、悠揚の氣風ある市に於いて、獨りこの輕鐵の極めて殺風景なるを見る。水前寺は細川侯爵の別墅なり、出水神社は其藩祖を祀れるなり、泉石丘樹のたゞすまわはや人巧的にして、自然の妙趣を缺くるところあれど、湧く玉の水の趣きは之れを補ふて餘りあり

廣やかなる池の面に、幾處か渦紋を描いて湧く水の面白さ、中には水凸かに盛上りて、水底深く何物の怪あつて舞ひ躍るかと思はるゝあり、不斷の圓波はしづらを織りて、漾々として浮影を揺かす、岸には未だ老ひざるの松なく、石には古苔繡ふがごとし、游魚隊をなして行き、人を見れども驚かず。

園に近き碧水亭に飲む、池より流るゝ清瀬や碧三尺、游舫あり繫がずして其去留に任す、鮎の魚軒、同じ魚のウライ、亦脆美、名物の鰻、尤も香膩なり、但し蒸さずして直に之を炙くをもて其風味を損す、江戸前に料理しなば更に太だ妙ならん。

五 熊本の半日

夜闌けて水前寺の旗亭を去る、月もなき川添ひ路に、滿地の雪と訝らるゝは、櫛の實より採り得たる蠟を簀に上せて晒すにてありき、銀杏城下の星月夜、殊に詩懷の動くを覺ゆる也。遙に警鐘の聲を聞く、霧澹き郊路に灯の影の繁く走れり、熊本の市の邊りを望めば、電燈の光り眞珠の色に空を暈して、揚がれる火の手を何處とも覓めがたし、車を春竹村に走らせて、

義兄駒井氏の家を訪ねれば、生憎や留守居の少婢一人のみゐて、聞き慣れぬ坂東聲の怪しき男の玄關の戸を亂打するを、折から火事のやゝ鎮まりし後の事として、必定賊の襲ひ來りしならんと怯ぢ怖れ、息を屏して敲けども應へず、尋常ならぬ物音に隣莊の老媪出で來りしかば、車夫をして事情を語らしむ、婢や始めて僅に戸を啓いて余を迎へたるが、尙ほ寒戦して齒の啊咤々と鳴るを見る、憐にも亦可笑かりき。

歸途に穿き小路にて火事場より回り來れる消防夫の一隊に逢ふ、車夫路を譲るに違あらずして其の列を衝きたり、銀杏城下の氣負の健兒、啖呵を切りて亂拳車を繞つて起たん光景なるに余は一向陳謝して事なきを得たり、危ふかりけることども也。

登早、駒井氏夫妻その兒を將て來り、共に樂き朝食をしたゝむ、折から友の余が爲に熊本城内見物の東道せんと訪れたりしかば、余等一同、その後を跟いて遍く城内を觀、且つ詳かに明治十年役當時の事を知ることを得、厚意謝するに辭なし。

友と袂を別ちて後、加藤神社に詣で、本妙寺に賽して、恭しく香火を捧げ、更に寺畔の寶物館に入りて加藤清正の遺品を觀たり、法華經紙を掲り編みて作れりと傳ふる烏帽子形の大兜

大身の鎧、七字の題目を記したる馬印、坐に鬼將軍の風貌を憶はしむ。

旗亭喜樂に入りて午飯、やがて駒井夫妻に汽車八代まで送られて後、獨り寂しく兩日一夜の銀杏城下の娛しき行樂を思ひつゞくるほどに、汽車はやがて球摩川の溪山に入る。

六 銀杏城を觀る

嶺南老兄足下、日本の古城史研究家たる足下に、余は今又遙に熊本城の葉繪書を寄せ、兼て新知の友に導かれて踏遍したる城内の規模を足下に説かんとす。

熊本城が加藤清正の築造したることは言ふまでもなし、當時の軍器と戦法とに鑑みて、實に理想に近き金城湯池なりしことも、亦説くことを須ひざるなり、明治十年干城谷將軍この城に嬰守して、潮のごとき薩の健兒軍に當り、以て大局を制したる其功勳は言ふまでもなければ、この城微りせば、九州の草木、新政厚徳の旗風に靡きたりしやも未だ知るべからざりしなり。昨年の大典記念として純和純洋兩様に建造されたる市の公會堂の輪奐を觀て、櫻並木の廣衢を北に進めばやがて城の大手なり、木欄橋あり、御幸橋といふ、橋を過ぎて濠あり、敗荷秋に

傾く、中に魚鱗多し、城壁層々として立ち、葛蘿これを掩ふ、石垣の上に空に挿す老楠樹あり、清正、手栽のものとなし、余等は峭り立つ石垣の間の路を行きて宇土矢倉の下に到る、宇土矢倉は、曾て小西行長の居城宇土にありしもの、清正之を移せるなりといふ、十年役の當時には一の天主、二の天主ありしが兵火に焼亡し、今は唯だこの宇土の矢倉を留むるのみなり、矢倉の石垣に砲丸の痕多し、花岡山の薩軍の巨砲の瞰射を受けたりしなり、壯烈なりし戦のさまを想ふべし。

宇土矢倉の下より登れば熊本全市は一望のうちに集まる、毎日午時を報する舊式の加農砲あり、傍に大なる井戸あり、窺へば漆を盛りたるごとく黒暗々として其の深さを知らず、傳へいふ、井の形は壺のごとく口窄くして内は廣く、底は城の裾を流る、坪井川に通ずと。

一の天主臺の跡に朽ちたる老銀杏樹あり、世繼の銀杏其の葉今や黄酣す、清正手づから銀杏樹を栽えて曰ふ、この樹成長して梢の天主臺と其の高さを齊しうせん時は、當に此の城に變事あるべし、慎めよやと、十年の役、この樹の梢果して天主の屋根の高さに達せりと、惜むべし老樹は兵火に焼けて今は唯朽幹を留むるのみ也。

横手五郎といふ剛力の士の、肩に懸けて扛げしと傳ふる大なる矩形の磐石の立つありたり、重さは百貫と註せらる、加藤清正の此の城を經始するや、横手五郎命を承けて工事を監掌す、城既に成れり、清正、五郎が城の規模を暗んずるをもて、殺して口を滅せんと謀り、誘ふて坑に押し擠し、從士をして大石を下さしむ、五郎固より大剛力あり、坑の底に立ちながら、降りかゝる石を手毬のごとく投げ返したりしが、力盡きて終に死す、或は曰く横手五郎は韓人なり、清正、朝鮮陣より拉し來る、最も築城の術に詳しかりきと。

苔蒸す石の礎を踏て、余れは一の天主臺の跡に登り、削成したる石垣には一面に葛蘿縈り掩ふ、西南に薩軍の巨砲を据へて城内を瞰射したりといふ花岡山を望む、山の中腹茂林のありるところは、南州翁の牙營ありしところなりといふ、三太郎山は正南紺碧の空を劃りて積翠の色殊に明淨なるを見る、當時黒田清隆氏の捉ぐる衝背軍の殺到したるところ、奥保鞏氏の率る聯絡軍の血路を開いて奔馳したるところ、歴々として指點すべし、二の天主臺の跡を尋ねて、更に一層の高きに登る、腑し見れば絶壁數百尺、東南平蕪のうちに、遙に煙水の漾々たるを見る、これ江津湖なり。

天主臺より危磴を下れば、抜孔といふものあり、天主臺の下を穿つて其外壁に通じ、更に折れて城濠に向ふ、荒草離々として行くに逕なし、曰ふ谷村圭介の城を出づる正にこの抜孔よりせるなりと、石に元祿十七年の文字彫られたるが僅に讀むべし。

再び宇土矢倉の邊りに還りて故の地藏門趾を観る、途に石垣の凹處あり、方四坪ばかり、石を登んで坪を作せるが、其甃める石の形は長きものあり窄きものあり、或は方正、或は歪形、矩をなすもの、銳角をなすもの、相錯綜し相密接す、説くものあり、これ石の大小廣狭に依りて當時の六十餘州諸大名の藩勢を象表したるもの、正に石の諸侯の勢力地圖なり、清正常に之を観て天下の形勢を考察したるなりと。

地藏門は唯だ大いなる礎石を存するのみ、礎の面に地藏菩薩の像を刻し、大永二年仲春の字あり。

遍く城内を観、更に加藤神社、本妙寺に賽したる後、旗亭喜樂に飯す、閑庭の竹樹午日を篩ひ、苔厚うして自ら塵なし、時に鶴鶴あつて來りて石に遊ぶ、市井の間にこの閑處あり、亦面白し。

七 林温泉の一夜

丹頂粹兄足下、余は今足下の故郷なる肥後の人吉町を訪ひ、薄暮、車を驅りて球摩河畔に在る林温泉の翠嵐樓の一室に詩箋を卸したり。

球摩川溪山の勝は、曾てこれを足下より聽けり、余の熊本より鹿島に行くの途すがら人吉に下り立ちしは、船を縦つて急瀬に泛び、半日溪山の勝を看つゝ八代に至らん游課を定めたりしなり、人吉の驛の人に訊けば、汽車開通後の川舟は、別に新たに仕立てざるべからずといふもて余は終に川船に乗るの機縁あらざりき、これ誠に憾み多し、但し汽車の窓より看めたる球摩川は峯を重ね嶺を復ねて、路なきがごとくにして又通じ、瀬を織り端を襲みて、水窮まるがごとくにして又豁く、其車窓取次に展開し行く風光は、醋だ彼の會津より流れて越後の海に注ぐ阿賀の川に似たるを思ふなり、更にこれを富士川に較ぶるに、幽邃なるは富士川に勝れり、岸甃りて石瘦せ水肥たる天龍峽のごとき奇峭なきも、彼の保津川のごときは、この球摩に比すれば境致及ぶべくもあらず、更に又水多く石亦多き木曾川に較ぶるに、球摩或ひは遜色あるべきか、

斯くいふものゝ、是は唯だ車窓より觀たる球摩川觀なり、卒爾に斯溪山を品評す、恐らくは山靈水伯の瞋を受けむ。

球摩川に船を縦つて飽まで溪山の勝を看ること能はざりし余は、其の河畔の寂しき湯の里に一夜を過して詩情の殊に濃やかなるを歡びたり、この無名の温泉、否、九州に在りては有名なる温泉なるかは知らざれど、余に於ては始めて其名を聞き始めて一夜を過したる温泉なるが、泉量の豊多にして而も澄明に、温度も亦暢和、浴場は田舎の温泉宿には珍らしく男女の室を區別して、廣やかに石を登み、中に二個の浴池を湛えたる、誠に快適なり、余がこの家に宿りし夜は、莊のうちに客は余唯だ一人のみ、夜闌けて虚廊を度りて浴池に赴き、青白き電燈の影を落して綃を織る湯の中に足ふみ伸ばせば、日に焦けて緒黒き余が身體は、雪のごとく白く見ゆ、靜に球摩の水音の雨に似たるを聽つ、詩を思へば、誠に世遙かに人遠き想ひありき。

八 人吉の半日

安らひ足らふ湯の宿の一夜の甘睡やがて覺むれば、簀を繞りて雨の音す、雨も亦面白しと

衾を撤ねて、曉の灯の幽かに残る長き廊下を度り、終宵湧き出で溢れ流れつゝ、いまだ人の肌觸れざる新しの温泉に浸りて思ふさま快浴す、浴衣の襟を寛げ帯を緩うして部屋に返れば、宿の婢ども既や起き出で、雨戸を繰る、雨と思ひしは大霧の簀を敲いて雨聲をなすにてありきこの邊り、霧の深き日は快晴なる例なりと婢ども語りつゝ、帚とりて帚ふほどに、霧は咫尺の前の庭の樹の影をさへ偷却して、蓬々然として座に入り來るなり、『婢は言ふ今日定めて晴好ならむと、大霧簀を敲いて雨聲を作す』と口吟す。

莊の主は徳富蘇峯氏兄弟を知り寺崎廣業氏を識る、一昨年の秋、廣業氏此の莊に宿りて統に畫がきし球摩の水墨山水は楣間に懸れり、主人の説くところに依れば、温泉の由來甚だ古し、今より四百餘年の昔、明應元年正月三日、領主相良爲續侯、この温泉に遊び、井の口八幡に連歌百韻を催し『補陀落の誓ひも深き湯樂寺の庭の泉ぞわけて妙なる』の詠あり、井の口は湯の口の轉訛、今尙ほ觀音堂あり、堂前の大銀杏は當時のものなるべしと。

朝九時、車を喚びて人吉に入る、新知の友の東道にて、相良城址を過ぎ、又た古刹願成寺に詣りて其の什寶を觀たり、町に傍ふて流るゝ球摩川や水濶し、中島あり、二橋を架して一は長

く他は短し、鳳凰橋と呼び做すなり、元擬寶珠の木欄ありしを、今は長き橋を鐵橋となしたるが爲め、大いに風致を損ぜりといへど、橋上よりの眺望甚だ佳なり、相良城は、二方に河を繞らし山を背にし、石垣は故の儘なり、元の大手橋のありしところ、淺き瀬の石に架せる板を渡りて一の曲輪より石橋、元の本丸に通じ、泉水竹樹あり、瀧祖を祀る社あり、社後より球摩の水濱に出で、渡りを呼べば、河面深く立て籠めたる霧の中より應と答へて、渡守の翁小舟を掉し來る、一掉杳然、霧を見て水を見ず、余は詩中の人となれり。

球摩川を渡りて傳法山願成寺に詣る、鎌倉以來の古刹、世々瀧主相良侯の香華院なりといふ門を入れれば九輪の石塔あり、傍らにある經藏と共に開山當時の物なりといふ、什寶のうち征西將軍懷良親王より寄進の寶劍は、唐木彫の三鈷を櫛として長さ一尺ばかり、鞘を拂へば秋の晴夜を度る天の川の白く匂へるごとき燒刃の鮮けさ、看めてあればむら肝の心坐ろに寒きを覺ゆる業物也、元と十口ありしが次第に散逸して、今はこの一口を留むるのみなりと、天國の作と傳はれど、竊に相州物なるべきを思ふ、本尊阿彌陀如來の木像は軀の長け三尺七寸五分の坐像にて、臺の高さ一尺七寸、妙相端嚴、殊にその衣の褶襞に技巧の精緻を見る、傳彩は多く剝落し

たれど、尙ほ閻浮檀金の妙光の幽かに莊嚴を發するのあり、先年國寶に錄せらるといふ。十三代の住持勢辰師の朝鮮陣に従ひて齋し還れる佛舍利水晶籠、其他の什寶多し。

午時を過ぎて人吉より汽車鹿兒島に向ふ、途は又た重嶺復嶺の間に入る、大畑驛を過ぎて、軌造は山を抱きて一大環を描き、旋轉して又た行く、我が邦唯一のループ式線なり、吉松驛は宮崎線の分岐點、足利尊氏京都に敗れて西海に遁れ、新に九州の健兒を糾合して、大舉東を指さしたりし當時の本營の跡は、驛を距ること數町のところに在りといふ、黄昏、加治木に入りて始めて櫻島の紫屏顔と紺碧の波穩かなる錦江灣を左窓に見る、覺えず快哉を呼ぶ也。

車中に、水間繁氏といふ生面の人あり、今川内川水源地に製材所を設けて盛んに樅材を輸出すといふ、始游の余の爲めに詳しく山河風物を説く、七時半、鹿兒島市に入り、車を驅りて城山の麓なる薩摩屋旅館に入れば、折から旅客の沓至して詩囊を卸すに處なし、僅かに別荘に一間室あるを借りて、風露一夜の安を得たるを喜ぶ、この邊は故の二の丸ありしところ、門甚だ蕭條、莊に近き屋敷の武者窓の内より喝聲の聒びすしく聞ゆるは、柔術の道場なるべし、莊を隣りて嘈々の琵琶の音するは誰がすさみぞ、流石は武をもて建つ故國の都とぞ思はれたる。

九 夜の鹿兒島

鹿兒島城下の星月夜、座敷の障子を推し啓いて、蜃氣夜蒸す萬家の燈火を看めつゝ、夜食の膳に對する時しも、水間氏の端りなく訪れ來り、余が爲めに半宵の清晤を共にせんとて拉し行かんとするなり、一向に辭謝してあるうちに、這回は又た日野辰次氏より電話ありて、旗亭青柳に余を待つ、疾く來たれと促さる、厚意を辭するに言葉なくて、車を夜の町に驅る、霜月の末といふに、小夜の風寒からず、燈の町は人の往來賑かなり、青柳は城下唯一の旗亭なりと聞く館の廣大なるは兩國の伊勢平樓に似て、樓上の大廣間は三百枚の疊を敷きたり、日野氏と相見えて閑室に淺く酌む、歌をうたふもの數人來る、うちに近頃下谷の同朋町より來れりといふものあり、脆絲哀竹、一曲の鹿兒島歌は、天涯の遊子をして一味幽寥の閑愁に禁へざらしめたり、大廣間の床の間に故伊藤春畝公の詩を懸けたり、曾て鹿兒島に遊びし時の作なり、曰く『歲月梭を飛ばして去つて還らず、故人骨を埋むる那邊の山、端なく官海風濤惡し、看得たり浮沈一瞬の間』と、筆力殊に雄勁、別に故品川彌二郎子の『天地酒盃中』と大書したる匾額あり

り、明地廿五年八月やじと落款す、廿五年は品川子内務大臣として有名なる選舉干渉をなせし歳なり、餘勇勃々、毫楮の間に流露して筆勢極めて奔騰、余多く品川子の字を看たれど、蓋しその傑作ならむ。

未だ晝の鹿兒島を看ずして、端りなくも夜の鹿兒島を觀たり、凡そ熊本以南名邑の料理屋、旅館の女中などは、皆な『おます』さうどす』の京阪語を操れり、語言牙々、聞いて解すべからざるべしと想ひたりし余は、到るところの女人の溫柔にして嫺媚なる京語に接して、誠に意外の感を作せり、其故を敲けば曰ふ、客商賣の家、殊に花柳の巷は大阪の勢力範圍なり、隨つて郷土の女人も、其郷語を棄て、儼然なる京阪語を習ふなりと。

一〇 岩崎の洞窟

翌、夙に起きて庭に面する雨戸を開け放せば、櫻島の紫屏顔、惠然として笑ひを含んで座に入り來る也、後に城山一帶の翠阜を負ひ、前には錦江灣の碧波を抱いて、鬱乎として萬葉の烟を蒸す鹿兒島市は、實にこの島山ありて一段の明淨、高朗の氣象を添ゆるなり、城下の隅々限

々に至るまで、窓として容れざるなきこの碧なす島山微つせば、鹿兒島は唯だ九州南端の平凡なる海市たりしならんのみ、但今の櫻島は、一昨年の大爆破にて全山に劫灰を被りしが爲に、實際のところ紫屏顔とは稱へがたく、赭屏顔といふ方適當ならんが、土地の人は、これでも餘程青みかゞり紫かゞり來れりと語れり、兎に角、紺碧なす錦江灣の真中に、なだらかに裾を曳いて海を窄しと歎り立つこの山の、幾年の春を歴て積翠の色舊時の觀に回らん時の其の看めは如何にぞや、今にても、晝にこそ赭色に見ゆれ、朝には紫を堆め、夕には碧を凝らし、もつて此の市の氣象を粉飾するなり。

紫を堆むる櫻島を几案の邊に看めながら朝食を終るほどに、日野辰次氏先づ訪はれ、飯田巽氏次いで訪はれ、池田米男氏余が爲に今日の東道の主となる、共に感謝に禁へざるところ也池田氏と車を聯ねて發し、行く／＼元の私學校の邊を過りて大小許多の砲丸痕を留めたる石の堀を看、やがて鐵道踏切を横ぎりて南洲翁終焉の地に詣り、更に程近き岩崎谷の洞窟を觀る、城山の裾の崖を穿つて、口窄く背を鞠めて入るべきも、内は濶くして四疊半もあるべく、土華落莫たり、『笑ふ儂死に向つて仙客の如し、盡日洞中棋響閑なり』と口吟しつゝ死と生とに超越

して、笑つて洞外の飛丸、亂蝗のごとく集まるを看めつゝ、冷々然として鎗略を盤上の黑白子に寄せたる老雄の風貌は、彷彿として觀るがごとし、明治十年九月廿八日、連哨の篝火明滅して落月一片城山の一角に懸る、天明けて鹿兒島灣内の龍驤艦より打ち出す砲丸、この岩崎谷に集り、陸兵も亦一齊射撃を行ふ、南洲翁、洞を出で、行くこと數十歩、飛丸股に中つて仆る、跟き隨へる別府晋介、乃ち翁の首を馘して村田正助の門前に埋め、屠腹して死す、桐野、村田、池邊、邊見の諸將、亦翁に殉ぜり、翁の終焉地には、石堀鐵柵、紀念碑儼として立てり。

一一 淨光朋寺

車を淨光明寺畔の路に驅りて、長き石の階を登りて南洲翁以下の墳墓に詣づ、翁の墓石を真中にして、左に桐野利秋、永山盛弘、右に篠原國幹、村田新八以下の猛將勇士の墓石立ち、供華、石を繞つて薫れり、翁等の墓より短燈一層を下れば、路を夾んで斯の翁の麾下の健兒の墓相列べり、石に彫られし行年の四十を過ぎしは稀にして、其の多くは二三十歳、十七八歳のものも亦少からず、悵然として三十年の昔を憶ふて林なす墓石の間を徃徊す、行年十四年十ヶ

月と彫りたる池田幸太郎の墓あり、中に就ての少年なるべし、行年十九の中村太郎の墓あり、太郎は京都に生れ、幼にして双親を喪ひ、人の爲めに勞役しゐたりしを、偶桐野利秋五條積を通りかゝりて太郎を見、之と語りて其の言の奇なるを愛し、携へ歸りて學ばしむ、太郎其の恩を感銘し、十年の役桐野の麾下に在りて健闘、九月廿四日、城山陥る時、桐野の死に殉すと傳ふ。

兒玉實直一門の墓石の前に建てられたる石燈籠の棹石に、福島縣人林權助と彫られたるを見る、實に今の駐支公使林氏權助其人なり、林氏は元岩代の人、年甫めて十歳の頃、故ありて鹿兒島に來り兒玉家の扶養をうけて郷校に入る、押川則吉、工學博士山田直矢は當時の同窓なりしといふ、後大阪醫學校に遊び、やがて又た東遊して大學豫備門に入る、兒玉實直、陸軍少佐をもつて官を罷め、南洲翁に從つて故山に歸り、終に十年の役あり、一門多く死す、この石燈籠は恩義を記せる林氏の供設するところなりといふ。

南洲翁等の瑩域を距る數十歩にして、素木作りの美廟その英靈を祀れるあり、賽し終りて社務所に憩ひ、翁の絶筆を観る、正に岩崎谷の洞中にて、死するの前夜燭を剔つて書き成したる

鏤心刺骨の文なり、時、午に近し、又た車を驅つて島津公爵の磯邸に向ふ。

一一一 島津公の磯邸

節は立冬を過ぎたれど未だ霜を見ざる南國の、頽嵐峭嶽常夏の色濃やかなる磯山の裾を度りて、海に傍ひたる廣き路に車を走らす、海を歴して聳り立つ櫻島山は、尙ほ一昨年爆破のなごりを留めて、洩々として岫を出づる雲とばかり白氣を吐く也。

旋て島津公爵磯邸の門に入る、車を棄て、青海波の帯の痕を描き留めし淨沙の路を歩みつゝ、邸を守る翁に導かれて先づ錫の御門より觀る、赤門なり、錫瓦をもて葺けるをもて斯く呼び做さる、朱は老ひたれど褪せず、瓦は古りて蒼古、門の構へも尋常ならざるは琉球王より贈進したるものと知られたり、簷長く縁高き御殿の前、庭廣くして樹石の布置に妙趣を發し老松數十株を前にしたれど海の眺めを遮らず、錦江灣の大景を樹間より見る、老松のうちの一株は文祿の役に朝鮮より齎したるものといふ、泉水の澗を行けば一閣あり、王羲之の字を集めたる望岳樓の額を懸く、十本の柱をもて屋を支え、四面に低き欄干を繞らす、都て漆塗りなり、

床に雲紋の方磚を敷く、亦琉球王の獻進したるものなりといふ、大友宗麟と戦つて分捕りしたる我國最初の巨礮『國崩』及び朝鮮より分捕したる佛郎機各一門あり、國崩は背に二百七十匁十九番の文字を鑄出し、佛郎機には葡萄牙の文字を彫り、馬具一切を装置したる朝鮮の大木馬と共に、皆當時の藩主の赫々たる武功を語る。

石橋を渡りて幽磯の上を行く、老樹深邃、孟宗竹林あり、傳へて日本最初の孟宗竹といふ、琉球より將來して此の山に栽えられ、やがて四方に移殖せられしなり。

日午、飯田池田の諸氏は、又余を邀へて錦江灣頭の風景樓に飯し、更に送りて停車場に至る款洽謝するに辭なし、思ふ今次の旅行中、隨處に未識の好友あつて愉快なる遊程を度りたるが中に就て鹿兒島の一夜と半日とは、余に深き印象を與へたり、旅館の閑雅にして家人の親切なりしも、亦孤往の遊子をして征懷の岑寂を忘れしめたり、薩摩屋の別荘は二の丸のありし邊、元島津氏名門の隠居所なりしといふだけありて、故けれど雅潔喜ぶべく、扶疎たる庭樹の間より居ながら櫻島の房顔を見る、品よき老婦人ありて事を視、物腰の淑ましき少女ありて客に接す茶を欲する時、言はさに茶を擎げ、睡を思ふ時、喚ばざるに衾を展ぶ、客毎に浴槽の湯を新た

にして進むなど、用意極めて周到、誠に尋常旅館に見る臭味なく、久客始めて家に歸りしが
ごとき心地するなり。

日向の宮崎神宮に詣るの記と、青島に遊ぶの記と、日向灘
上の一夜の三篇を収む、大正五年の十月、九州本線の吉松
驛よりの分岐線宮崎まで開通したり、大阪商船會社の汽船
は、宮崎を距る七里（輕便鐵道あり）の内海より毎朝出帆、
細島、土々呂、蒲江、佐伯、津久見、臼杵、佐賀關、大分、
別府より、四國の港を歴て、大坂へと往復す。

日向洋上

宮崎神宮に詣るの記

天南樓主人足下、汗漫の遊程を貪りて歸期を愆まらんことを虞れ、余は終に足下が懇に勸められたる霧島登山を果すこと能はざりき、但し宮崎道中の汽車の窓より、この嶮崢たる山の雄姿を耽看したり。

夜に入りて都の城を過ぎ、九時大淀川の長橋を渡りて宮崎に入り、神田橋旅館に投ず、浴を取りて直に寝ぬ、遙に海潮音を聞く。

翌朝九時車を、ふて町を驅る、市塵のさまを見るに、別に郷土の特色といふものなし、唯だ魚を賣り菜果を鬻ぐもの、皆な女子なるが目を惹きたり、熟柿の殊に大いなるがあり、簞の下に擔を卸して客を待つ、魚を棕櫚の葉に裹みて提げ行くものあり、畫趣あり、俳趣あり。

町を距る十町ばかり、廣やかなる道を行けば、やがて宮崎神宮也、神武の帝の宮居ありし故趾といふ也、大いなる銅華表を入れれば左右に櫻並木、やがて第二の銅華表を過ぐれば神苑な

り、華表の左右に大蘇鐵の栽えられたる亦南國の風趣を見る、神苑には櫻、梅、松など栽えられ、池ありて石橋を架す、造築以來年尚ほ淺ければ、樹石いまだ老ひずして尋常一様の遊園のさまなるが、本宮正門前の華表の邊、十數株の老松、中に一株の巨杉を交へて、落々として天に參するさまは、誠にこの境域を莊嚴せり、四脚門を入れれば滿地の淨沙纖塵を留あす、花崗石の磴石路は砥のごとく十二の太柱もて屋を撐げたる拜殿の中を貫いて、正殿の階の前に至る、千木高く空を挿したる宮居、拜殿、四脚門より左右の廻廊、數年前の造營なれば木の香も風に薫るばかり、神々しさは身に泌みて覺えず襟を正しうす、正面の神鏡の白光四邊を射るを仰ぎつゝ、余は階の下に跪つきてをろがみまつれり。

青島に遊ぶの記

黒潮、日向の海の三十六灘を貫き流れて、くねり松の根を張り幹を列ねたる砂濱遠く打ち寄せて、割れて碎けて裂けて飛ぶ波頭の、永久に荒ぶる磯に傍ふて珍らしや熱帯地方の草木を

もて掩はれたる小さき島あり、青島といふ、常夏の緑四時に濃やかなれば、斯く呼び做されたるなり。

大淀の長橋を渡りて同じ名の驛より輕便汽車に上る、この輕鐵は宮崎町と内海の港とを聯絡する唯一の交通機關なり、宮崎の町に傍ふて流るゝ大淀川は、其の河口と海門との落差の甚だ低きが爲めに、常に流砂を壅堆して船を泊するに便ならず。物資の吐吞はこれを七里を距てたる内海の港に由らざるべからざる也、若し宮崎が天恵に饒かに、大淀の河口にして港を成しなば業に既に殷賑なる一大海市となり、日向の國は夙に殖産事業の開展されたるなるべし、日向の國は、他の鎮西諸國に比して人烟稀少、到るところに未墾の土地多き也。

やがて青島驛に着く、大淀より四十五分道の道程なり、亂松のうち二三の旗亭あり、洗洋たる日向灘を前にして眺望甚だ濶し、松原の逕を行けば沙嘴遠く出で、繪のごとき青島浮べり潮落つる時は砂を踏んで行くべく、波高き時は、板橋ありて渡るべし、この邊一帶數里の磯は、岩礁、巖を疊みて遠く敷く、喩へば猶ほ麥圃などの畦を見るがごとし、不斷の波の浸蝕に由りて、夷らかに海に入れる陸地の斷層の、疎鬆の土砂の肉を洗ひ、頑硬なる岩礁の骨のみを留めたるものなるべし、亦た一奇觀なり、砂濱の端より島に架せるや、長き棧橋を渡り、暖かき日に光る眞砂の路を行けば、竹にもあらず又た蘆にもあらずに餘れる植物の蒼々として茂るを見たり、こは是れ南洋の濱に生ふると聞く蘆竹なり、橋を過ぐる一步にして、風物頓に變じ、身は既に異境に入るなり。

一一

荒葬たる蘆竹林の蔭には、三尺に餘れる文珠蘭の叢を成すあり、馬鞭草科のはまかづらの籤をなすあり、海桐科のとべら、水龍骨科のをにやぶそてつ亦多く、紫金牛科のもくはちばなの幹の太さ徑七八寸梢の高さ二丈に超えたるもの、衛矛科のまさきの巨大なるもあり、桐の一種の火桐といふもありき、殊に人をして驚異せしむるは、周圍十四五町と註せらるゝ此の島山を掩うて、生ひ繁れる檳榔樹の茂林なり、蒼白き太き幹の節を襲みて蟲乎と高く立ちたるが、大なる羽團扇のごとき葉を重ねて、蓬々として海風を扇ぐさまは、日本の内地の何處にも見ること能はざる殊奇の觀めにて、其の實を咬みて齒の涅みたる黒奴の、其葉を編みたる腰蓑を着

けたるが、木蔭より現はれ來べきかと余は恍として訝かり惑へり。
 島に入る數十歩、二三の茶亭あり、青島神社の賽路を夾みて數株の老松あり、祀れる神は彦火
 女出見尊、豊玉姬尊及び鹽筒命の三柱なり、社の邊の大芭蕉、正に花を着けたり、花蕊長く
 抽くこと五六尺、累々として實を結べるも亦奇觀なり、其の葉は芋のごとくにして白條ある不
 食芋といふものもあり、社後は則ち檳榔樹の深林にして、その幾百株なるを知らず。
 神職、長友氏の語るところに依れば、社の舊記は多く散逸して詳しくは考へ難けれど、文明三
 年藩主より土地寄進の文書あり、文龜四年本社再興の棟札あるを觀れば、六百年前既に斯神社の
 儼存したることを知るといふ、想ふに暖流の關係に由りて、往古より此の邊一帶この種の植物
 の茂生しありたるもの、久しき年所のうちに伐採され、この島のもの獨り神社の境地なりしが
 爲めに、斧斤の災を免れて保護されたるものなるべきか、今は厳しく草木の採取を禁ぜらる
 葢爾たる此の一少嶼は、誠に植物學上の寶庫と謂ふべき也。

日向灘上の一夜

八重の潮路を南の海より漂ひ寄りしと言ひ傳はれる青島の、檳榔樹の茂林の蔭に低徊して坐
 る南荒の地に遊ぶがごとく想ひしたる余は、終に愛を割きてこの島を去りたり、濱の松原のう
 ち、今上の東宮に在ませし時、九州御巡遊の砌、この青島を御覽せられしお野立の蹟の豐碑を
 仰き、神職長友氏の莊に憩ひて、軍配晝顔の葉を乞ひ受け、青島詣での紀念とせり。
 黄昏、歩いて大淀の長橋を渡りて旅館に歸る、風烟蒼茫たる長江を欄干の邊に看めて、頻り
 に詩懷の動くに禁へざりき、夜既に闌けたり、江や黒うして漆のごとし、唯だ燈影の度るを見
 て橋あるを知り、艚聲の過ぐるを聞いて舟あるを知るのみ、遙に海門のあたりを見れば、月あ
 り細うして牙のごとく、低く昏潮に粘く、洪濤の聲遠雷に似たり。
 翌朝六時、宿の婢を促せど容易に朝餐を持ち來らず、今日は内海より大阪商船會社の船に上
 り、日向灘を渡りて別府温泉に行かんとする也、車は既や門に候せり、朝餐漸く來たれども輕

鐵發車の時は迫れり、慌たゞしく箸を執れど、熱飯舌を爛らさんとす、僅かに半碗を喫し、鶏卵を割つて仰ぎ呑みつゝ、咄嗟に車を驅る、僅かに汽車に乗り得て後、何かは知らず吾が髭のこそばゆきに撫で見れば、鶏卵の黄子したゝかに塗れぬたり、車中の人の余の顔を見て目笑せるは是れにてありき、覺えず一嘘を發したり、昨日遊びし青島を車左の海に看めて八時内海は市に入り、九時愛媛丸に上る、八百噸の客船、雅潔喜ぶべし、艀を操りて野菜を船に賣り來る多くは婦人なり、肌膚胖かにして黎からず、體格も亦短矮なるもの稀に、中には男子を凌ぐものさへあり、其の姿勢の正しきは、物を頭に載せて運ぶの風習あるが爲なるべし、凡そ薩摩、日向、別けて日向には體格の好き婦人多く、而も容色の醜からぬもの亦多し。

二

九時、吾が愛媛丸は内海の港に纜を解きて、荒莽たる日向灘の八重の潮路を北へくへ行くなりき、午後一時、細島の港に入る、二三の小嶼繪の心に波に浮びて、奥深き港を擁し、大船小船の檣は林をなして、母の懐とばかり安らかなる入江に泊れり、紺碧の潮を湛へし

この港を夾みて、山は夷らかに立ち列び、町は左の山の裾に傍ひ、家毎の窓、欄干の、波の面に影を落して、遷透として連らなれるは、長き江添ひの町とし觀られて、港とは思ほえず、松杉青き山の峽に、折からの檀紅葉の點綴して、風色喜ぶべし、大凡港のさまは伊豆の稻取にさも似たり。

愛媛丸は棧橋の邊に横づけられ、卸す貨物載する貨物の荷役に忙しかりき、上甲板の藤椅子に踞して港のさまを見てあるうちに、兒を負ひし古女房の、十二三とも見らるゝ瘦せさらばひし一少年の手を引來りて、艀門の邊に荷役を督する一船員に、この子を紀州和歌山まで送り呉れよといふ、少年は洗ひ晒しの飛白の袴に同じ羽織を重ね、温かき日なるに襟巻して烏打帽子を冠れるが、病後の人らしく痛く衰へ、背には小さき風呂敷包を負ひ、手に藥瓶を提たり、船員はこの病少年の一人旅を容易く諾はざりしが、他の船員のうちに和歌山の人ありて、終にこの女房の頼みを引受け、扶けて船に上らしめたり、この子は食べたいが病なれば、風呂敷包の中に在る三度の辨當の外は、何物をも與へて下さるな、錢は大阪より和歌山までの電車賃を持たせあり、さらばお頼み申ますと言ひ捨て、下駄の齒の音朗らかに棧橋に踏み鳴らして疾歩に、

別哀離苦の色も見せず立去りたり、想ふにこの少年、兩親に早く別れて海山遠きこの細島の商家に雇はれるたりしを、病ありて今日しも獨り寂しくその故郷へ送り還さるゝなるべきか、余は坐に哀れを催したり。

二時半、細島を出で、四時、土々呂に少時泊る、日漸く暮れて波高し。

三

冥色遠きより來りて、日向の灘は漆の海なり、海氣霜を飛ばして甲板の籐椅子は、鐵よりも冷かりき、晚餐を報ずる銅鑼の音に促されて食堂に入れば、此處は燈華やかに春を蒸して、余が眼鏡のうち暈る、舷を繞ぐる昏濤の聲を聞きつゝ靜かに食事を済ませて定められたる船室に退き、碧地の帷深く卸されたる温かき臥床に脚踏み伸ばして、山陽詩鈔を讀むほどに、やがて何時しか睡り去りたり、夢現のうちに、船の痛く揺ぐを覺ゆ、吾が愛媛丸の豊後水道を過ぐると覺えし。

翌朝七時、船は大分港に入る、去年の夏、此地に訪れし時、築港いまだ其の功を竣らさりし

が、今日見れば黄金を敷く朝日の波を抽いて、ペトンもて築き固めたる眞白き防波堤の長く海を抱き、泊り船の檣林と立てり、氣象雄大、思ひ出多き春日の濱の松の林を看めつゝ朝餐の卓に對する時、船は又た纜を解きて、懐かしき四極の山の裾近き浦を傳ひて、まだ晴れやらぬ狭霧の絶え間より、海を拱する參差の臺榭の巖に壁に初日の色を紅く暈して、次第に開展する温泉の都別府見えたり、やがて濱の棧橋に吾が愛媛丸は徐に泊る。

日名子旅館に詩囊を卸して、何はさて風呂に入る、鎮西一周の旅の塵を、この温泉に洗ひ去りて、烟茶少時を憩ひし後、折から訪れ來りし日名子助役に導かれて、別府驛内の温泉洗面所水力電気會社、電車發着所の俱樂部の乗客無料浴場、公園内に新たに建られたる大分縣商品陳列所を看たり、水道新に成りて戸毎に清泉を引き、棧橋の築造も成就して大船を横づけにし得べく、殊に四邊隨處の温泉地に埴道を開通して儘自働車を驅り得べき循環道路を設計し、既に其工事を始めたるなど、之を會遊の時に較ぶれば誠に異常の發展なり、中に就て驛のホームに於ける温泉洗面所のごときは、前年來既に設備せられ、盤中の温泉噴くこと一尺、溢れて水晶簾を懸けたるは、泉量の豊富なるこの地ならねば爲し能はざるところ、天下に停車場多しといへども

この簀澤なる温泉洗面所あるは、獨り別府驛のみなるを思ふなり。

瀬戸内海の風光

瀬戸内海を西の方より、鶴川、宮島、宇品、音戸の瀬戸、竹原、忠海、やがて玉の浦の尾道に至る記行を收む、

瀬戸内海の一日一夜

一

舊識の鶴見山又四極山、再游の余を迎へて屏顔笑ひを含み、翠を舒べ碧を曳いて依々として詩舫に入り来る、浴みし罷んで浴衣の襟を披きつつ窓前の風に當るなど、冬ながら温泉の都はさながら昨日けふ秋立つ頃とも訝からるゝなり、四時佳ならざるはなしといふ別府温泉は、中にも冬を避くるに最も好き地とぞ思はれたる、黄昏五時半、今宵瀬戸内海に嚮ふ佐波川丸の早や錨を揚げんとす、急に輕刺を飛ばして船に上れば、船はやがて別府の港を出でたり。

夜闌けて鶴川の港に入る、潮黒く月昏く、見るところなし、一燈の波を趁ふて來りて船門を敲くは客を迎送する小舟なり、枕を喚びて眠る、朝雲暮雨、徂徠の船のはかなき戀を載せ去りしといふ室の津を夜半に過ぎて、柳井津に少時し泊り、天未だ明ざる頃ほひ、宮島の邊に錨を卸す、嚴島神社の廻廊の灯曉に残りて波に搖ぎ、彌山の影唯だ眞黒に船に迫る、旋て夜はしら

く明けて、船の纜を解く時しも、吾が船近く朱寂びしたる大鳥居のをぼろくと立つを見たり、宮島の海の看めや、此大鳥居ありて畫龍晴を點す、疎雨數點。

朝七時、宇品の港に入る、雨細うして烟のごとし、一と先づ船を下りて大阪商船會社の乗客待合所に憩ひ、待つこと半時ばかりにして新たに下の關より來れる天龍川丸に乗り、風煙繪がくがごとき似島を舳右に看めつゝさながら平湖のごとき海を行く、江田島の邊を過りて、吉浦と鍋とに少時泊り、吳軍港の沖を渡ればやがて音戸の瀬戸に入る。

平清盛が開鑿したりと傳ふるこの瀬戸は、窄きこと僅に一町許、綃を織る小々波の、人に媚びたる海の色は俄に荒び、船の倉橋の島の岬を過ぎて路なしと見てあれば、船頭忽ち長峽を開き、紺碧の潮は其の波頭に雪を噴いて、この窄き海門を萬馬駢び馳するの勢をもて奔流するなり。

二

『船頭可愛や音戸の瀬戸で一丈五尺の艦が撓る』といふもの正に是なり。

瀬戸内海の風先

船は音戸の海市を舷右に看めて、この急潮に上りて行くこと疾し、音戸の町、水に枕んで粉壁瓦屋の参差として連れる、大いに畫趣あり、岸近く波を抽いて、高く石を登みて築き成したる一小嶼の、上に老松の偃蹇として立つあるは、傳へいふところの清盛の墓なり、此の嶼あつて音戸の瀬戸の風光一段の美趣を添ふるは、喻へば猶ほ名手の一子を下して全局の石皆な活くるがごとき也。

音戸の瀬戸を過ぎし頃より雨やうやく繁し、阿賀の浦に少時泊りて、やがて猫の瀬戸を度る此處は上下の蒲刈島の相隣りて仁方、内海の陸地に接し、安藝の灘の急潮を窄き水道に束ね流す、紺碧の海の面にて渦まく波の頭の雪を翻せる、唯見れば幾萬端の縹緲の布を披らくが如し、水道の邊りに小さき猫島あり、香箱つくる猫の姿にさも似たり、瀬戸の名はこの島より起れるなるべし。

猫島を過ぎて翠色餐すべき柏島あり、この邊りより吾が船を繞つて皆な島なり。四に顧みれば路なしと疑はるれど、やがて舳頭に海は豁く、迎ふる島は依移として雨より出で、淡墨いろの其影の次第に明るき緑の色に變り來り、送る島影はやう／＼に又雨のうちに翠靄せ行き、縹

渺として終に見えず、余の占め得たる船房は宛かも中甲板の端に當りたれば、扉を啓き帳を掲げて紅茶を啜りつゝ、飽くまでこの雨に奇なるの風光を看ることを得たるなり。

雨に又雲に、淡粧濃抹せるこの島山の、欄干近く詩を齎て行き繪を載て來れる取次の看めに耽りつゝ、竹原、忠海の浦に泊りて、やがて絲崎の港に入る、翠阜環のごとく海を懷いて港の晝や靜かなり、午餐の膳に廣島の牡蠣のフライあり、香脆喜ぶべし、肉叉を執りつゝ、大いなる貝の肉柱などなるべしと味はひしが、牡蠣なりと聞きて、余は始めて廣島の海に産する牡蠣の、其品の世に優れたるものなるを知り得たり。

午後三時、吾天龍丸は、小佐木島、長太夫島、鯨島、岩子島の邊を過ぎ、向島に傍ふて終に尾の道に入る、雨既に霽る、玉の浦一帶の人家の墓、さては町を懷いて立つ大寶山の寺觀亭樹晴れやかに斜陽に媚べり、尾の道の風光は、この山の浮圖と樓臺とあつて、一段の佳趣を添ゆるを思ふ也。

三

汗漫の遊び日を重ねて、歸期を愆まらんことを懼れたる余は、更に船して阿武菟の瀬戸、觀音堂、仙醉島、鞆津の諸勝を遍く觀んと思ひし當初の遊程に愛を割きて、之れを再遊の機縁に寄せ、終に天龍川丸を辭して尾の道町に入る、午後五時にこの驛を過ぐる急行列車に搭じて、東歸の途に上らんとするなり。

汽車に待つ間の二時間を徒爾に費やさんとを惜みて、先づ車を大寶山千光寺に嚮つて驅りたり、窄くして賑しき市廛の間を行けば、路はやがて幾曲して僅に車を通すべきほどの露地に入るなり、路窮まつて長磴眉を壓して歛つ、立てたる石に大寶山千光寺と鐫れたり、車を捨て、登る。

長磴又短磴、路を夾んで旗亭多く町の紳士の別荘多し、喘ぎつゝ登り行きて時に少留すれば、繪のごとき玉の浦一帯の佳景は次第に開展するなり、當面の一大島は向島、これに隣れる小嶼は岩子島、加島、面島、佐木、高根島、潮は三原、布刈の兩海峽を開いて、名ある島、名なき島、縹渺として夕陽の海に浮ぶ、古き書に見る歌島の郷は正に今の向島なるべし、年若き島の女の夜泊の船に歌を賣りて、魚鼓蟹笛、風を待つ間のつれづれを慰めたりけむ、今中國の要津たる

尾の道の繁華を、落寞たりし魚莊蟹舎の音に思ひ較べつゝ登り盡せば、一區の淨地は此に豁けて、欹り立つ蒼巖の陰に倚る琳宮寶殿のたゞすまぬ面白く、而も其の建築の唐様めきて見えたるは、尋常一様の寺院のさまに異りて、玉の浦の名に相應はしき歌の郷ならずして、實に唐詩の境とぞ思はれたる、殊に寺の庫裏に傍ふて竝つ數丈の大岩の太奇なる、玉の岩の名に呼ばれて、曾て岩の頂に夜光の珠を藏したりしを、來舶したる唐人の竊に盗み去りしと傳へられ、珠を採りし跡の今に凹ぼの孔を留むといふ、折からの蔦紅葉、この岩を紅に碧に繡ぬひして綺麗ものゝ喩ふべきなし。

岨の邊、鐘樓の下の茶亭に憩ひて、玉の浦一帯の風光を總攬したる余は、唯だ恍然として少時は人我が境を忘れ果てたる也。

大正六年八月

五日印刷

『日本道中記』

定價金八拾五錢

大正六年八月

八日發行

著者檢印



著作者

遲塚金太郎

發行者

和利彦
東京市日本橋區通四丁目五番地

印刷者

石川金太郎
東京市京橋區西紺屋町二十七番地

印刷所

英舍
東京市京橋區西紺屋町二十七番地

發行所

東京市日本橋區
通四丁目五番地

春陽堂

電話本局五十一番

振替一六一七番

名家傑作集

錢六各料送・錢十五册各

第十二篇	第十一篇	第十篇	第九篇	第八篇	第七篇	第六篇	第五篇	第四篇	第三篇	第二篇	第一篇
還魂錄	彼女と少年	月夜の美感	五月三夜	十去來	野の花	白露露	水彩畫家	照葉狂言	其面影	不言不語	不言不語
森鷗外氏著	徳田秋聲氏著	高山樗牛氏著	正宗白鳥氏著	樋口一葉女史著	國木田獨步氏著	田山花袋氏著	幸田露伴氏著	島崎藤村氏著	泉鏡花氏著	二葉亭四迷氏著	尾崎紅葉氏著

戲曲選集

錢六各料送・錢五十五册各

(9) ■ 日本武尊	(8) ■ 改作 牧の方	(7) ■ 狂藝人	(6) ■ 牡丹燈籠	(5) ■ 室町御所	(4) ■ 戲曲 日本橋	(3) ■ 脚本 金色夜叉	(2) ■ 俠客春雨傘	(1) ■ 沓手鳥孤城落月
武者小路實篤氏作	坪内逍遙氏作	吉井勇氏作	長田秀雄氏作	岡本綺堂氏作	泉鏡花氏作	尾崎紅葉氏原作 小栗風葉氏補脚	福地櫻痴氏作	坪内逍遙氏作

歌集と新詩集

長塚節著	薄田泣菫著	幸田露伴著	金子薫園著	森鷗外著	島崎藤村著
長塚節歌集	二十五絃	あ心との出 蘆	覺めたる歌	うた日記	藤村詩集
送金 壹圓 十二錢	送金 料 壹圓 八錢	送金 料 八圓 八十錢	送金 料 四圓 六十錢	送一圓 八錢	送金 料 八圓 八十錢

小品文集

藤島村著	紅葉崎著	相馬御風著	小内山著	愛山路著	横山健堂著
藤村文集	煙霞療養	田園春秋	北歐旅日記	思ふがまゝに	鉛筆だより
送金 料 六圓 十五錢	送金 料 五圓 六十錢	送金 料 六圓 十五錢	送金 料 七圓 六十錢	送金 料 壹圓 八錢	送金 料 壹圓 八錢

新文章雜誌
中央文學

行發日一回一月每

新しき人は新しき糧を求めざるべからず文壇諸名家の創作評論詩歌等、及び若き人々の熱意ある詩文を満載する本誌は、正にかゝる要求を充すべき新しき糧と云はずんばあらざり。されば苟も將來文藝の士たらんとし、若くは文章の練磨を志す人々にして本誌に就かざらんかその喪失するところ蓋し大なるべし。先づこの新糧を試みよ。而して新しき心を育め。……

懸賞募集

(意隨題)

日廿月每切

定規稿投

■論 ■散 ■短 ■俳 ■書 ■日 ■小

記輪

文(二十字以內) 文(二十字以內) 歌(三首以內) 句(三句以內) 文(二十字以內) 文(二十字以內) 說(二十字以內)

文(二十字以內)	相馬御風先生選
文(二十字以內)	長田幹彦先生選
歌(三首以內)	與謝野晶子先生選
句(三句以內)	内藤鳴雪先生選
文(二十字以內)	編輯局選
文(二十字以內)	編輯局選
說(二十字以內)	鳥崎藤村先生選

定價と送料

■一册拾五錢(送料一錢) 海外送料六錢 但支那は内地並	内地	金四拾六錢
	外國(支那は内地並)	金六拾一錢
■六册共 金九拾 錢壹圓貳拾錢	内地	金四拾六錢
	外國(支那は内地並)	金六拾一錢
■十二册共 金壹圓七拾五錢 貳圓四拾七錢 但し臨時號及び特別號に對する増額は前金中より差引計算す。	内地	金四拾六錢
	外國(支那は内地並)	金六拾一錢

注意 御注文は必ず前金のこと 送金は振替貯金が御便利 郵便切手代用は定價一割増

誌雜刊月るせ溢充の利實と味趣

新小説

行發日一回一月每

◎新小説は文壇各方面の權威と潑刺たる新聲とを網羅する。
◎政治界、文學界、思想界、宗教界、經濟界、科學界等苟も國民的文化を形成するあらゆる社會の問題に對して、最も穩健にして而も進歩的なる批判と主張とを齎らすものは本誌である。
◎一切の閥族と、一切の政黨と、一切の金權と、一切の學派と、一切の宗派とに超越する本誌は、公平にして自由なる一大文明批評機關である。
◎紅葉、露伴の光輝ある傳統を繼承せる本誌創作欄は現に猶日本文壇の最高權威である。
◎清新にして而も含蓄に充てる趣味の讀み物は本誌を措いて他に求むることが出來ない。
◎演劇革新の急先鋒として常に新國民劇建設の機運の醸成に努めつゝあるものは本誌である。

定價と送料

■一册金參拾錢(送料三錢) 海外送料十二錢 但支那は内地並	内地	金九十三錢
	外國(支那は内地並)	金壹圓廿三錢
■六册共 金壹圓八拾錢 金貳圓四拾錢	内地	金九十三錢
	外國(支那は内地並)	金壹圓廿三錢
■十二册共 金參圓六拾錢 金四圓八拾錢 但し臨時號及び特別號に對する増額は前金中より差引計算す。	内地	金九十三錢
	外國(支那は内地並)	金壹圓廿三錢

注意 御注文は必ず前金のこと 送金は振替貯金が御便利 郵便代用は定價の一割増

新紀行文集

遲塚麗水著

山水供養

送金料七
六十錢

遲塚麗水著

山東通路

送六料十
六五錢

島津男爵著

南洋記

送金料九
八十錢

王井紅葩著

山河十四州

送金料六
六十錢

春陽堂編纂

紀行文粹

冊四
送各料金
各壹錢

麗水水蔭
竹風金風著

金剛杖

送六料十
八五錢

田山花袋著

日光

送三料十
四五錢

菊地幽芳著

日本海周遊記

送金料壹
八錢

364
241



旅ニ題のうち

⑤
1945

終

